

逆境の慰安



逆境の慰安

ジーン・エイッチ・ナイト原著
文學士 高橋正熊譯

東京内外出版協會



逆境の慰安

目次

一	序説、普通の洗禮式	一
二	一切は謎か	一一
三	心靈の治療が第一	二二
四	心の痛みと歩みの疲れ	三三
五	精錬者の火	四四
六	雲に映れる日の光	五五
七	『然り、夫れ斯くの如きは聖旨に適へるなり』	六八
八	悲みの人	七七

九 營々たる苦役……………八九

十 『彌のかくまひ給ふもの』……………九九

十一 暗中の危険……………一〇八

十二 變れる姿……………一一八

十三 碎かれたる希望……………一二九

十四 夜の歌……………一三九

十五 長き最後の一哩……………一四九

十六 渡頭に臨みて……………一五九

十七 墓邊……………一六九

十八 失意者の悲み……………一八〇

十九 雲の奥……………一八九

二十 永劫の住家……………二〇〇

逆境の慰安

一 序説 普通の洗禮式

エリノアズ・ゼ・テマナイトは、世故に長けた名言を吐いたものだ、『苦惱は土芥より出でず、悲哀は地より湧かざるに、人の生れて艱難を受くるは火の子の上に飛ぶが如し』と言ッて居る。斯くの如きは苦々しい顔をした厭世者流の言ではない、輾轉不遇の覺醒者の慷慨悲憤は亦斯うしたものでない。此れは愛世を恐れず、之を正面に見た人の落ちついた而かも悲しい言葉である。そして斯くの如き人の言葉は三千年以前も今日も同じく眞理である。憂愁は普通の洗禮である。——洗禮も様々だが、是ればかりは普通である。晩

餐式の時に葡萄酒の盃を廻すが、此の憂愁の杯は毎もぐる／＼次へ／＼と廻つて行く。アダムの子孫たる吾々人間は、何時かは兎に角之を幾分なりとも飲まされるものであつて、苦い／＼渣滓ばかりに成るまで之を呑み乾す人も少なくはない。苦き杯は手から手、唇から唇と渡され受け取られて、普く世界中を廻るものである。

輕蔑せぬばかりの口調で、世界を『涙の谷』などと言ふことが有るものかと言つて居る人は、屹度事實といふものゝ見えぬ盲目である。涙とは萬民の愛世の旅路におく露のことではないか。孩兒の面にも涙は見える。成年男女の目からも盛んに下る。老人は老人で矢張り涙がある、而かも其れが涙のうちで一等鹽からいこともある。又心の奥ふかき悲しみの印が外部に表はれて居ない場合でも、人知れず心で泣いてる事も有る。悔恨の涙とか、心配の涙とか、口惜し恥かしの涙、失望の涙、此の世に望みの絶え果てた涙、天罰免

れ難きを泣く涙などがある。世界中の長い身の上話を皆集めたら、エゼキエルに所謂『巻物は裏と表に文字ありて、上に嗟嘆と悲哀と愛患とを録す』所の一卷と成るであらう。

愛患の人の身にふりかゝる事は豫め期す可からず、將に説明す可からざるものがある。そんな風で愛患が深酷に何度でも／＼やつて来るのは實に不思議であるが、更に不思議なるは、其れが單に神を離れて生活せる人のみに降りかゝるのでなくて、——若し其れならば別に不思議も無いが——謙遜、神聖、敬神の生活をして神と共にある人、即ち禍患を招くやうな事をした覺のないもので、唯他人の罪惡の犠牲となつた様な人にまで、其れが降りかゝる事である。斯る場合は其の愛患は一定の罪業に對する罰として臨み來るわけではなくて、唯慈愛ある而かも峻嚴なる試鍊、即ち人を更に大且つ神聖なる善に到らしむ可き試鍊として臨み來るものである。然し何のみち、これは遁

れることは出来ぬ。如何に其の打撃に對し反抗することが猛烈であつても駄目である。

さても何が故に此のやうな分り切つた事をくどくと言ふのか、唯之に劣ない大真理を出したい爲めである。即ち神は全て惱める者に慈愛あり親切ある慰めの福音を興へやうとして居なさるといふ一事である。是れは前來の説にあらざる真理であるが、人は左程に信じて居ないのである。けれども、神の聖書には第一章よりして最後の章に至るまで、優しい慰めが澤山書いてあるのは此の事を證するのである。また是れ聖書にある生命と希望が惱める人にあれほど随喜せらるゝ所以である。

蓋し聖書は、何は兎もあれ喜びの書である。悲哀も大分あるが、其の悲哀に打勝つことも大分に書いてある。聖書中で最も深沈の調を帯びた處は、其の練りかへし喜悅のことを説くところにある。而して其の喜悅の福音は、不

思議に人に元氣を添へ、楚々として人を動かすものが有る。

試みに想へ、此の世の過去及び現在の實相を。其の悲劇は無量、其の悲愁は無數ではないか。然らば則ち人ありて之を慰め、之に元氣を興へ、之に希望を興へんことは、世人に最大の急務ではなからうか。而して之を爲すは即ち聖書の務めである。何となれば聖書は『慰安の神』即ち『われらに訓へて聖書の忍耐と慰安との言に藉りて望みを得させん』との御心ある神の書だからである。

『よく考へて見なくてはならぬ事は、他でもない。聖福音書が若し惱める者を慰めるやうな事を言つて居ないなら、死ぬるまで毎週教會に集まつて來る聴衆の數は誠に僅かであらう。重荷に堪へずして蹣跚居る貧しき者、弱者、失望せる者は、慰め人その人が泣いた事のある人で、吾を頼つて來るものも、泣く運命の人間だと知つて呉れなくては、之を慰め人と仰ぐことを承

知すまい。既に慰を得て居る人のみに對して説かる、宗教は、丁度天氣の好い時ばかりに講究した航海術のやうなもので、天にも地にも暗闇と雲ばかりで道標の見えない様な時や、名も知らぬ海にて眞の暗夜に荒れに出會した時などの助けにはならない』とハンチントン監牧師は言つて居る。神の福音は無用の慰安者の與へた福音ではない。これは光明と愛と希望と生れ故郷とを教へたものである。本書に説きたる神の福音を讀むもの、庶幾くは此の言の偽ならざるを悟らんことを。

世には神の慰藉を以て何等の興味も無いと爲て居るものがある。其れに二つ種類がある。——一には、未だ深い悲しみに惱まされた事の無い人たち、二には自己の罪業に全然無頓着な人たちである。終生のんきで氣樂らしい人たちは世到る處に澤山在る。彼等は身體がよく、娛樂が多くて、樂にしたくも心配などは無いから、側で悲哀の人が沙漠中の清水のやうに渴望する慰安

の言葉も、馬の耳に念佛と聞き流して居る。甚しきに至つては、神の慰の御聲が、りがあつても、何とも思はぬものが澤山居る。彼等には容されざる罪業の重荷に堪へないのは如何に苦しいものかといふ經驗が少しも無いのである。斯くの如く自足せる人に本當に必要とするのは、慰安ではなくて深き悔悟の創傷である。致命の昏睡の驚破である。即ち痛める心に支柱をかけるの必要ではない、救世主の膝下に平伏し懺悔に胸を裂く思ひをして見るのが必要なのである。

然し心情及び人生の悲しみを知り、神の同情と救助とを眞に必要と思へる人に取つては、本書は十分否十二分に之を供給するものである。蓋し本書は神とは本書を讀まざるもの、想像だも及ばざるものなる事を證明し、神は無量無限の憐憫を有つた御方であつて、例へば愚なる兒を鞭打しながら、悲しみの涙、其の兒の頬にあるを見ては、此の惱めるものを雙の腕で抱き上げて、

矢張り慰安を與へて呉れる父親のやうな御方であると證明したものである。此の考で聖書を通讀すれば、其の中には慰安の要素が案外多いのに驚かれる。又如何ばかり神は慈悲を以て罪人を處分し給ふか、其の悲しめる者、心いためる者、試練に遇へる者に對し、如何に親切に言葉をかけ給ふかに驚かされる。本書に發見せる大なる神の御約束は、大抵みな困難窮迫の境遇にある人に與へ給ひし御約束である。若し吾人にして一たび左る境遇に近づき、又は之に陥ることあらば、此の御約束は皆吾人の信仰によつて吾人にも與へらるゝものである。而して吾人一たび之を與へられるに及んで、始めて其の慰安の力の偉大なる事に吾人自ら氣づくものである。凡て神約は山川に架したる橋の如きもので、水落ち石出でたる時には、餘り難有味が分らぬが、一旦洪水が出て、奔湍兩岸にせかるゝ折には、其の有りがたさの眞味が分るのである。神は吾人の不慮の事に對しては悉く豫め備へさして置いて

下さつたものであつて、悲しみの數々一として豫め察し置き給はざるものは無い。然し神の御慰めの有りがたみは、之を頂かねばならぬ時節になるか、死ぬる時が来るかせねば決して分りつこは無いものである。而して一たび其のやうな時節に到つて吾人は往々此の慰安が永く吾人の到るを待つて居たものだと初めて知つて喜び且つ驚くものである。其れまでは此の慰安は丁度吾人の欲しいと思ふ通りに間に合つて呉れないと不足を言つたのである。かくて初めて目が開いて其の不思議の視力で見ると、成る程、吾人が神を思はざる時にも神は吾人を思出して下さつたり、又吾人の必要を豫め察して其の備へをして下さつたりしたものと分つて来る。而かも其の必要を實際に感じる日はまだ中々遠いといふ時分から、神は豫め之を察して居て下さつたもので、且つ神だけしか之を知らなかつたものである。

Will of His glorious Son !
Without Thee how could earth be trol.
Or heaven at last be won ?

B. Barton.

二 一切は謎か

人生の悲痛事は少なからざれど、何れも奇妙な事には其の豫期す可からざるを以て特色として居る。其の臨み來るや青天の霹靂の如くである。嘗に其の豫戒が無いのみならず、別段目に立ッて其の出現の理由が見えない。故に之が爲めに悩むものは、或は怒り、或は自暴自棄して、何故に吾に此の悲しみを送れるぞやと絶叫するのである。一時驚きの餘り、爲す可き所を知らず、終に神に背き奉るに至るの例は、ヨブ以外にも尠なくはない。彼等はヨブの如くに『何故我と争ふかを我に示し給へ』と天に號泣するのである。而して終に何等の答も與へられざるに於ては、彼等或は至て是れ不可解のみと觀じ、或は冷々然たる態度と半ば反抗的態度とを取りて、『萬事免れ難き運命』と諦め、之を今度は神のやうに崇拜するに至るものである。

然し其の實、神の爲され方は全で『謎』だと言つて、あゝ悪かつたと思ひなほす事も往々あるものである。人間或は神の御處置が少しく解しかねる事もあらう、然し又其の理由の中には人に明々白々たるものも無いではない。大抵の場合に於ては、是れ明白に神が、吾人の無分別な自己中心的な我儘な俗悪な思に満ちたのを、一寸踏み止まさせて一考せよとて、吾人に聲をかけ給ふ爲めの御方便である。此の方便は、峻酷にして而かも慈悲に満てるものである。此の方便に依つて、人の心は愚なる安住を棄て、吾人の最善最幸福なる生活を取り損なはずの憂ある俗世に對する戀々の情なるものを棄てるものである。

『馬の爲めには鞭あり、驢馬の爲めには銜あり、愚なる者の背の爲めに杖あり』とはソロモンの名言である。彼は之を自己の経験より得たるのみならず、其の父ダビデの教訓より得て居るのである。ダビデの言葉に『汝等わき

まへ無き馬の如く驢馬の如くなる勿れ。彼等は銜、手綱の如き具をもて引き止めずば近づきたる事なし』とある。

氣隨氣儘の生活は一生を茶毒するものである。之を制限しやうとして、神が吾々の爲めになるやうに制尅を加へ給ふのが、其れが吾人の苦患といふものである。地獄に墮つる畜生同様の生活がして見たくば、神は吾々を畜生同様に處理して下さるだらう。さうすれば、齒と齒の間には冷たくて固い銜が篋められ、鞭が容赦なく當る事であらう。之に反して疼い制尅を蒙むるは、即ち我儘な靈魂の救濟せらるゝ所以である。傳道の書に曰く、『賢き人も虐待によりて狂するに至ることあり』と。然るに之よりも偉大なる傳道者がある。所謂放蕩息子の妙諭を引いて、苦患が狂者をも賢とする事を説いて居られる。即ち放蕩息子は、其の我儘な放蕩生活によりて自ら悲しみを招き、而して其の悲しみが極點に達したる時、初めて彼は『本心に立ち還り』たるも

のであって、其の時から生れ變つた人間になり、『吾は立ちて父の許に行かん』と獨語ちて、聽て其の父の胸にすがりて、且つ耻ぢ且つ悔いて泣訴するのである。

然し銜と手綱との入用なのは唯全くの無分別漢ばかりではない。大體は敬神の人であつても、甚しく神を離れて迷ひ出る事がよくあるから、其れを元に立ちかへらす爲めには自己の恐さを思ひ知らす爲めの嚴酷な方便が入用なのである。ロトを其の墮獄せんする罪科より救ひ出さんが爲めに、神が其の口に向け給うた『銜』は、誠にひどい銜であつた。彼が恐にも家居をトシたのを滅ぼし、彼の有らゆる宿を亡ぼし焼き盡くすより外には、神にも善い手段は無かつたものである。ダビデ王は、其の罪の兒の死したる様を眼前に見て、泣きの涙に咽び、己が子供は一人々々彼の殘年の老い耻と不幸との種となつた時、彼は報いの『鞭』の恐る可きを知つたのである。又ゼボシヤ

バットが、悪人アマジアと黨與だとき、烈しき暴風が來て、其のオビールへ金掘りに行く爲めに造へた船を壊し、船エジオングバーにて粉微塵に成つたのは、誠に神が世俗的野心の恐なることを痛切に彼に教へられたものである。

苦患は悔悟せよとの神の御命である。苦患は神の名代で、吾人に豫言を爲す所の豫言者である。但し此の豫言者の聲は、所謂野に呼ぶ人の聲であつて之を聞かんとせば野に出でざる可からざるものである。而して人間の思ひも寄らぬ程に人間を愛して下さる所の神は、吾人を導いて野心滅却といふ虚心の野原に到らしめ、以て世俗の聲に壓倒されて居る聲、即ち『なんぢ勸をき、訓を受けよ、然らばなんぢの終に智慧あらん』といふ其の聲を聞かしめんとせらるゝのである。ヤコブは、命たびく至つても、無禮にも之に反抗して、アブサロムの許に往くことを拒み、アブサロム終に『其の麥畑を焼き

盡く』すに及びて、始めて急ぎ到つたといふが、吾人も神が言ふ事を聞けよと仰せらるゝを拒めば、神は先づ吾人の一切の樂しみも、日用の品物も、焼き盡くして終ひ給ふ事があるかも知れぬ。若し左様なつたらば大變である。吾人を自滅より救ふには他には何とも仕方のない事がある。そこで神は『汝の平康なる時、われ汝に語りしかども、汝は我に聴かじと言へり。汝いとけなき時より我が聲を聴かず、是れ汝の故智なり』と言ひ給うた。『故に神の慈悲と峻嚴とを忘る可からず』と聖書に録いてある。然し又、忘るまじきは、神は其の慈悲で、何等の効驗も見えぬといふまでに至らなければ、徒らに其の峻嚴を用ひ給ふものではないといふ一事である。峻嚴は愛情で、間に合はぬ時の最後の手段である。従つて峻嚴も畢竟愛情である。此のやうにして、幸に神に喚び返された人は、皆神を讃めて、矢張り神は峻嚴だからよいと言ふ。ヘゼキヤが『主よ、これらの事によりて人は活くるなり。吾が靈魂の

いのちも、全くこれらの事によるなり。願はくは吾を醫し、吾等を活かし給へ』と言つたのは、至て神のこらしめ給へる兒等の心持ちを言ひ表はしたものに過ぎない。

以上の言葉には天上の崇高喜樂の響きがある。其の教ふる所は下のことである。即ち地上の希望が打破されて了はなければ、天上の希望は得られないといふ事、また自分で拵へた極樂から逐ひ出されなくては、神の極樂には入られないといふ事、父の御手に鞭たれずば、其の父の家には住むことを得ざる事ともである。

基督信者と雖も、時には多くの悲みを経ねばならぬ事がある。何故さうであるかは、矢張り此の理由で説明がつく。彼等は神の福祉以外には、如何なる福祉も半文の値打なき事を知つて居る。神にして賛同の笑貌を見せ給はずば、彼等は自己の精神が全く光明を失つたやうに感ずるものである。其の笑

みの光があれば安心が起るが、其れが無ければ真くらやみになるのである。彼等の求むる所は、此の安心に満たん事である。さればと言つて、彼等は此の安心を得んが爲め、多大の冒険を爲すことを欲しない。日常生活に於ける朝夕の習慣、計畫及び大望などを遂行するのに、彼等は片眼を神に向けながら、片眼は俗世につけて居る。彼等は現世の樂しみと贅澤とに頗る戀々として居るから、是等の現世的事が、其の眼界を遮つて、神の光榮が遙かに眼界外に逸し去るに至るのである。彼等は固より神の光榮に隨喜しないではないが、いや實は中々隨喜もして居るが、現世的の考が是等を壓倒して居るのである。此の現世に戀々たる感情が先づ取り去られなくては、神の平和を十分に享けることは出来ない。然るに、神は此の世俗的の考を殺すには、苦しみの訓練を厳しく施すこと以外には方法がないと見なはし給ふ故、或は病患至り、或は虚弱となつて、世間的活動が出来なくなり、愛兒を失つ

て、世間が心細く見えるやうになり、運が急に傾いて、自己の極樂から絶望の曠野に逐ひやられるのである。斯くて、俗世間の幸福を、愚にも追求し、終に身を誤まらんとした是までの經歷が閉止されるのである。即ち神の慈悲の御手が、彼等の所謂『幸福』を打破して、彼等に『安心』を與へることにするのである。何となれば平和を受け入れるに足るだけ、精神が虚になつて居なくては、此の平和は心に入つては來ないのである。

詩篇第九十九は之を歌つたものである。曰く『なんぢは、人間の猿智慧を、手ひどく打こらし給へども、彼等を容し給ふ神にて在します』と。神には『慈悲』と『峻嚴』とが並び存して居る。其の慈悲は吾人々間に與へらるゝものであつて、其の峻嚴は吾人が神に奉事へると共に罪惡と愚行とに奉事へ、甚だしきは自己の一生を此の二つに任せて神につかへざる時に吾人に施さるゝものである。神の目より見れば、幾多の人の一生は、皆自己に奉事するの一生

であつて、神に謀反するの一生である。吾人は神を禮拜すれども、神が絶對的に王の如く吾人を支配することを肯んじないのである。人間は、何のくらの利己心は神之を宥して、吾人に打撃を加へ給はざるかと試して見やうとして居るやうにも見える。然るに神は、いつも吾人を宥してやらう／＼として居られる。たゞ餘り我儘がつくと、神は打撃を加へ給ふのである。神は怒つて之を加へ給ふのではない、吾人が神をして之を加へざるを得ぬやうに仕向けるのである。其れも世に一切の道理が引ッ込んで、罪業が絶對の權威を以て跋扈するならば兎に角、神といふ歴とした方が御有りなのだから、其の神は之を黙ッて見て居るわけには行かないのである。斯くて、若し人間が傲慢の家を築きて神の入ることを拒み、以て神に對する挑戦を爲すに於ては神は其の挑戦に應じ給ひ、其の結果、地上に哀號さこえ、生活なるものは、悉く沙漠の如き荒蕪を來たすであらう。これは當然左様あるべき事である。

斯くの如くして、神に反抗するよりも、地上の悲しみを忍んで居た方が、何千倍よいか分らぬ。若し其の悲しみの爲めに却ッて悔悟して神を信じ、終に天上に到ることが出来るものとすれば……。

Through pain to peace. Through weariness to rest—

That Love may seek thee, Love comes darkly dressed:

Neglected, spurned, she smites thee, blow on blow,

Until she sees thee lying crushed and low;

Then shows thee, hid within her yearning breast,

The healing balm thou else couldst never know.

三 心靈の治療が第一

凡て禍凶は罪惡に對する報いであると思ふ人あらば、全で人情にはづれた非常に不正な考と謂はねばなるまい。昔はヨブの友に自得して居た男があつて、お前は偽君子だ、お前が罪惡を自白しないから、神様が罰しなさるのだと言つたことがある。又或る人、エスに告げで、ピラトはガリラヤ人を殺しましたと言つた時、エスは其の心中を看破して、『左様の憂き目を見るのは、凡てのガリラヤ人より罪が深い爲めだといふ了見で申すのであらうが、左様ではないぞよ』と言はれた。天意を斯く誤解した例は、エス自身の弟子連の中にもあつた。或る時、生れながらの盲目を見て『その弟子かれに問ひて曰ひけるは、ラビ此の人の瞽に生れしは誰の罪なるや、己に由るか、又二親に由るか』とありましたので、エス之に答へて、是れは全く報いと申すわけではない、『此のものによりて、神の作爲の顯はれん爲めなり』と告げられた。

禍凶が時として報いであるやうな事も無いではない。さういふ事例は聖書に幾らもある。然し、報いのが明かに分る時には、已に其の報いの元なる罪が先づ明かに分つて居るものである。人間は報いだけ頂いて、罪は覺えがあらう、勝手に考へて見るがよいと放りツばなしにされる事は決して無いものである。罪惡のことを先づ明かに分るやうにして、然る後に神は報いを送り給ふものである。さればこそ神の『懲らしめ』の事を、人往々、神の『御咎め』とは申すのである。キリストも此の事を認めて居られたから、三十八年間ののざりを癒やされた時、其のものに向つて『それお前の病氣は癒えた。病氣より恐ろしいものが来るかも知れぬから、再び罪を犯してはならぬぞよ』と言はれた。此の御言葉で見ると、此の躉者は、四十年近くも罪ある生

活をして居て、誰も知らず又記憶ても居なかつたけれど、キリストは之を知
 ツて、暗に之を諷せられたものなることが分る。

吾人は固より他人が過去に何んな悪い事をしたかといふことを知るもので
 はない。假令んば知ったところで、他人に禍がふりかゝつて来るのは、其
 の報いだなどと断言の出来るわけのものでもない。然るを尙ほ、他人が俄か
 に禍にかゝる事があると、其れは何々の報いであるなどと、直ぐに判断を
 すると云ふやうな、非凡い判断家が世には随分多いことである。然し彼等と
 ても、斯んな矢鱈な判断をされちや、大に迷惑であらう。

斯んなわけで、他人のことについては、是は報いだ、是は報いでない杯と
 思ひ切つた事は言へぬけれども、自分自身の場合に於ては、往々それが分
 るものである。他人には分らず、又他人の思ひもよらぬ罪であつても、自分
 の良心だけはそれを知ツて居るからである。基督が己の足下にかつぎこまれ

た病人に對し、先づ「子よ、心安かれ、爾の罪赦されたり」と言はれたのは、
 即ち此の良心の働きが、其のものゝ心中に起ツて居ると看破せられたからで
 ある。側の人から見たら、其の病氣は、世の常の肉體の病であると思へたら
 うが、主は今こゝに臥床て居るのは、單に肉體上ばかりでなく、精神上でも
 病人であると看破し、精神のなやみの方が、一方よりも重いと云ふ事を見ら
 れたのである。壁者に對し基督の言はれた言葉は、傍觀者から見たらば、う
 まく其の場の御茶濁しをやつてるやうにも見えたのであらう。其處に居合は
 せたものは口にくそ出さね、基督は病を癒やすの能力なき事をかくさん爲め、
 精神の治療を爲すのである。精神治療の方は、虚實の證明がつかぬから都合
 がよいのだらう位に考へて居たらしい。之に反して、其の事實を見たのは、
 其の際二人だけに過ぎなかつたであらう。一人は即ち病人其の人であつて、
 今一人は其の思念と行爲とを見そなはずキリスト其の人であつたらう。此の

二人は、其の病を以て過去に於ける罪惡といふ遠い原因を有するものだと認め、其の遠因が其の早老早衰の肉體を永久にをかして居ると認めて居たのである。此の病人は何時も『わが罪つねに我が眼前に在り』と獨語して居たものであつて、基督は『宥す』との言葉が、此の男の最も聞き度く思つて居る言葉であるといふことを、よく御承知だつたのである。

以上は苦患に關する意見である。これは看過してはならぬ。今日世間には、病氣等に惱みし時、わが知人が憐憫の意を致して、貴君の是までの生活には、此の不幸を受く可き咎は少しもないなどと言つて呉れるのを、難有がツて居るものが少なくない。然し此んな時には、其れは君間違つて居るよと言つてやるが宜いではないか。何故ツて、本人自身は固より、醫者も彼の今日の苦しきは、過去の不養生の報いなることを知つて居るではないか。彼は『其の若い時の不正を我がものとするの已むなきに立ち至れるもの』で、恐らく今

始めて古人の懲戒の力あることを感じて居るものである。其の懲戒とは、耶利米亞書に『汝の途と汝の行ひ、之を汝に招けり。これは汝の惡なり、誠に苦しくして汝の心におよぶ。汝の惡しきは汝をこらしめ、汝の背きは汝をせめん。斯く汝が汝の神エホバをすてたると、我を畏るゝことの汝の衷にあらざるとは、惡しく且つ苦きことなるを、汝見て知るべし、と主なる萬軍のエホバいひ給ふ。』とあるものが即ち其れである。彼が知人は、彼の斯く苦しみを平氣で忍んで居るのを見て驚くであらうが、實は彼が苦しいとも得言はで忍んで居る理由は、他でもない、彼は日々斯く獨語して居るからである。自分では皆之を受けただけの覺えがある』と。それで本人はちツとも神が其の罪の爲めに己を懲らしめ給ふことを不思議とも何とも思つては居ないのである。却つて其の懲しめが、千倍も之より峻嚴であつてよい筈だらうにと不思議に思つて居るのである。

斯くの如き場合には、何が必要かといふに、何はさて措き、救世主の言葉が必要である。醫者の言葉ではない、即ち罪を宥し救を與ふべしとの御慈悲が必要なのである。世には病床に臥すに及んで、初めて此の言葉を聞き得たといふものが、幾千人あるかわからない。これは聞かうと思つて、心の耳を開きさへすれば、誰にでも聞かれる言葉である。ダビデ王は言つた、「われ主の前に我が愆をおほはざりき」と。それから如何なつたか、「かゝる時しも汝わがつみの邪曲をゆるし給へり」とある。神の宥免は即座に與へられるから有り難い。我また汝の罪を數へんなどと反訴的の事を言つたり、躊躇が行はれたり、例外が設けられるやうな事は、神の宥免には無い事である。就中在再久しきに彌るやうな事はないのが嬉しい。放蕩息子が久しぶりて涙ながらに生家に歸つてくれば、父は腕に抱き上げて之を迎へたとある。之を迎ふること斯くの如く即座であつた。又厭や／＼ながらでやつたのでも無かつた。

故に罪に惱めるものは、其の何人たるに論なく、若し誤まつて過せし過去の生活を悔ゆるの念に満ち、又は現世的の野心が破壊した時、悄然として己を虚うせば、「罪の宥し疑ひなし」と思つてよい、否、思つて信ず可きである。何んな信仰が別に有つたとて、其れはかまはぬ。此の上もない神の御宥しが得られるといふ信仰は、是非無くてはならぬ。而して此の御宥るしは、キリストの流し給ひし救世の血に信頼しさへすれば直ぐに得られるのである。あゝ難有いかな、世界廣しといへども、基督の救ひの御手にすがりて、此の優しき御めぐみが得られないといふ人は一人も有りはせぬ。ラザルスが死して四日も過ぎてから、之を蘇生させた御聲は、四年の十倍も二十倍も罪に沈んだもの、魂をよみがへらす力がある。如何に年ふりたる罪とても、神の永遠の御慈悲より古くはなく、如何に有力の罪とても、神の萬能の慈悲の如く有力ではあるまい。

若し苦患の爲めに懺悔が起り、懺悔の爲めに信仰が起り、信仰の爲めに宥免が得られ、宥免の結果、心に安心が出来るものとすれば、其れで苦患に慈悲の意味あることは明白であらう。固より苦患は罰でない事はあるまいが、罰に罰ばかりのものではない、迷路にあるものを尋ねてあるく救世主ならでは「雲きりたちて暗き日に迷へる羊をたづねてあるく」御方は有るまい。神は罪の報いを與ふることを喜びとはし給はぬ、却つて救を與ふることを以て無限の喜びとし給ふものである。そして人を苦しい憂き目にあはせ給ふのも、決して他意あるのではなく、全く其の苦痛、其の失望の爲めに、却つて人が一旦棄てた父を思ひ出し、其れが縁となつて、其の人が再び父のもとに復つて来るやうにとの御意である。重き苦患になやめるもの、嘗て神を如何なる御方と思ふやうになりたるかと問はれし時、彼は身體は弱り、懺悔は心に起つて病床に在りながら、「あゝ、神は非常に宥免に富み給ふ御方である。寛

大な宥免者である」と答へた。彼は救ひ主が「子よ喜べ、汝の罪なんぢに宥されたり」と仰せられた御言葉が耳に聞えたのである。其の御聲は、今も後も「故郷に立ちかへれ、立ちかへれ」と聞えて居るのである。あゝ如何ばかり神は人が何とか應答をするだらうと待つて居られるか分つたものではない。神若し吾人を低きに下し給はば、是れたゞ吾人を高き上げん爲めである。一旦低きに落して再び高き上げるやうな骨折りを神に御かけ申すは申譯のない事である。

然るに宥免を與へ給ふ主が、ヤコブの井戸に在る罪ある女に向つて言ひ給ひしは何とであつたか。「若し汝、神の賜物を知り、又今吾に水のませよと言ふものゝ誰なるかを知らば、汝まさにこれに願ひて、其の生命の水を與へらるべきに」と言はれたのではなくて、これ以上の難有い御言葉であつたのである。「汝彼に願はんとしたるなるべく、彼また汝に與へんとしたるなるべ

し』といふのであつた。これは取りも直さず、「限り無き生命てふ非常の賜物は、既に汝の有たる可かりしところなるに、又過ぎし五分がほどのひまにて汝は有免と安心と兩つながら己が有と爲し得可かりしものを」といふに同じであつた。

One knock at the door would have opened wide

The home so dear to your heart's desires;

And the hours you spent in the porch outside

Might have glowed by the household fires.

G. Matheson.

四 心の痛みと歩みの疲れ

罪の報いの苦患——即ち何か特別の罪を犯したる爲めの咎めたる——は、傍觀者の知ツてるより多數であるかも知らぬ。然し其れは例外に過ぎない、決して常例ではない。病氣、不慮の難、死別生別の如きは大抵其の何故に人に降り掛かつて來るかの説明の出來ぬものである。これは罪が招來したものと考へられない、如何しても神が送り給うたものと考へられる。即ち神が罪を罰する爲めでなく、將來の罪を或る場合に於て防ぎ、且つ人の夢想たもせざる善を凡ての場合に於て果さん爲めに送り給ふのである。是等の苦患は、神が私憤を洩らすの手段ではない、反ツて永遠を見透し給ふ、やさしき神の愛より出でたる御訓練なのである。

此の説は特に、かの殆んど一生涯の間も續く所の大苦患に當てはまるので

ある。即ち幼時よりして老年に及び、終に最後の時までに至る苦患のことである。固より斯かる苦患は遺傳といふことで説明が出来ぬ。即ち虚弱な肉體が無意識に代々つゞくといふやうな事で説明が出来ぬ。或る場合に於ては、父祖の罪が斯くして子孫苗裔に及ぶやうな事があるかも知れぬ。然し果して其れが左様であるかとの證據は無い、否有るかも知れぬが、人間の眼に見える様な證據は無い。但苦患は神意に由るとは言へる。然し其の意志とても、殘酷、冷淡、無情、無慘なる意志ではない。何となれば人の老衰の後も、すつと神は注意の眼を光榮ある目的に着け、其の實現に孜孜として勉めて居給ふからである。——即ち「余は汝等に對する余の思を知れり。是れ平和の念にして、凶禍を下さんとの念に非ず、豫期の目的を汝等に與へんとの念慮なり」と宣ひしものが其れである。而かも目的といつても、遠き極樂の圓融無碍の理想境を神が眼中に置き給ふわけではない。現在

唯今の現世に於て人の性格を神聖にし美化せんとの目的に外ならぬものである。さればこそ、人もよく知る通り、何れ如何なる所に於ても、一生嬉しうな顔をした基督教徒は、必ず長が年、病の床に就いて全く衰弱し切つて、殆んど刻々苦痛を嘗めて居る人々である。

神恩は不思議なもので、『主の愛し給ふもの、主これを懲らしめ給ふ』ものとすれば、其の多く愛し給ふものは多く懲らし給ふから、最も多く懲らし給ふものは、其の最も多く愛し給ふものであると謂はねばならぬ。

然し人の信神の念と忍耐とを試めすには、斯くの如き訓練に勝るものは無い、病の長びくのは、甚くても暫くしかつかぬ様なのよりも耐へ難いものである。ヨブは一日のうちに苦患が雨下し蟄集した時には、よく之を耐ふることが出来たが、神の苦しめの御手が日に／＼彼の頭上に近づいて来て、此の分で行つたら、死ななければ不幸は止むまいと思はれた時、彼つひに參ッ

てしまつて、己が生涯をのろひ出し、又は生れざりせばなどと恨みつらみを列べたのであつた。苦患の強い弱いは何ともないが、其の長きに互るのが一番失望を起し易いものである。たまく信神の念が止まないで長が年の苦しみも、全く神の美且つ完たき御意志に出づるものと快く之に耐へたる場合に於ても、其の耐へ忍ぶ骨折りが身にこたへて感ぜらるゝものである。かの全く聖人のやうなペインソン博士すら、此の間の消息を傳へて下の如く言つて居る。「毎晩々々死に神がやつて来て、自分の枕邊に立ち、爰に恐ろしい程のひきつけが起る。一度ひきつける毎に、これで精神と肉體とが別々になるのかなかと思ふ位、それがつゞくと、病勢がますます募つて来て、後には一本一本骨がいたみ出す。すると、自分は明夜もまた此の苦しい目に遭ふことかと思ふのであつた」と言つては居るが、又下のやうに安心があつた。曰く「かほど我が肉體の苦しめる間にも、精神は全く幸福であつた。それは迎も口や

筆では言ひ表はせない程であつた。神に任せ奉る我がよろこびは非常なもので、此の苦患を辛抱するは愚のこと、却つて歓迎したい位に思つたのであつた」と言つて居る。嘗て病める教會員を訪ひし時、彼卒爾として病者に向ひ「君は何故に神が人を病臥せしめ給ふか御存じか」と問うた。病人これに對して、自分は未だ左様のことは考へても見なかつたと答へたらば、彼應じて曰ふやう「自分は其の理由を知つて居る。其の人々をして仰いで觀るを得せしめんが爲めである」と。是れ實に彼が病中、神より賜はつた不換金の教訓であつたのである。

神の子にして日々現に此の教訓を授かりつゝあるものが少くはない。絶えず苦しみに呻吟しつゝあるでなければ、長く不健康で務めが執れないとか、人並みの樂しみも出来ぬとか、病床に臥したなりで、何一つ人手を藉りなくては用が足せぬとか、自分の不自由が厭やになり、時としては、半ばは諦ら

め半ばは痲癩を起して「ア、唯一週間でも達者で居られたらばなア」と嘆息するものがある。

さて彼等は必要もなきに此の苦しみに遇はされて居るのであらうか。そんな筈はない。是等の病人を愛し給ふ所の神は、其の代償を授け、又善き機会を與へて居られるのである。神は彼等に限り、他の多數者よりも多くのものを授けて居られる。即ち彼等は神聖化する力ある所の、而して慰安の力ある所の神恩を受けつゝあるのである。彼等は他の多數者よりも悲しみの人キリストに對する同情が多い筈である。キリストからの密なる御見舞が彼等には頻繁に来るのである。是に於て彼等はまた吾人よりも他人に施す力が多い事になる。何となれば吾人よりも彼等の方が神恩の優渥なる事を、其の接する人毎に知らせる事が多いからである。彼等の日ごとの生活は、基督の力に人に悟らす所以である。即ち基督には「健康」よりも善いものを授くるの

力、基督御自身の「安心」を授くるの力があるといふ一事である。而して此の「安心」は唯苦しめる人の顔にのみ表はれるものである。

ステイブンのやうに苦しみの眞最中にありながら、「天の使のやうな温顔」をして居るものも少なくはない。彼等は自己の經驗からして、悲しい時には基督を愛すること、喜びの時よりも甚しく、明るい時よりも暗い所での方が、基督をよく知ることが出来るといふことを知つて居る。夜なかの丑三頃に、平和の天使は、時々彼等に来るものである。蓋し其の時分が丁度苦痛に堪へずして、輾轉反側する時なのである。此の時、天使は病者の枕元にこいんで、「受くる者のみ知れる所の珍らしき名の書いてある白き石」を持って來るのである。

早く死にたいと思ふのは、虚弱な人、病み臥した人ばかりの考ではない。他にも長く生きるに厭きの來た人がある。尤も是等の人は病者ほどに同情は

受けない。即ち獨り心を痛めて居る心の病人のことである。其の心のいたみは、知る人稀れであつて、稀れに知る者といへども、十分に察知することは出来ぬ。世には左様の人々が随分多い。即ち他人の世話はしなければならぬし、自分の事などは見て居られぬ、そこで絶えず己を犠牲にして、せつせと稼いでも、養つてもらふ方では有り難いとも思はぬ様な、さういふ人もある。俄かに不運が一家に落ちかゝつた時、又は夫に死なれて、妻は迎も一家を支へる腕がなく、全家舉つて一人の總領息女の細腕に縋るといふやうな場合には、此のけなげな娘の雙肩に情け容赦もなく責任の重荷が、うんと懸かつて來て、此のさき獨りで此の大責任を如何仕遂げやうかといふ見當もつかず、娘の生命も之が爲めに縮まるやうな事があるものである。此の娘などが家族の爲めに一人で世話をするのは、世間では當り前の事としてあつて、又實際其の責任を殊勝に果たすやうな例は幾らもある。そこで此の娘も手の出せる

ものには何にでも手を出し、家庭では苦しいといふ顔もせず稼いで居るが、其の胸のうちには人知れぬ苦しみがある。但それを本人が口に出して言はぬだけの事である。此の娘が親兄弟の爲めに如何ばかり犠牲になつて居るか、知る人は一人も無い。又親兄弟の爲めに生命よりも大切な宿志素願をも捨てたことも、世に知れる人はない。誰も此の娘が十字架に釘づけ同然の境遇である事を知つては呉れぬ。彼女は人の知らぬ克己をして、人並の樂しみもせず、それで居て周囲のものは別に感謝もせぬ。固より彼女はそれを不平で口に出して何とか言ふやうな事はせぬが、これでは毎日宗教殉難者同様の目に遭つてるのである。彼女は勇ましく又やさしく此の苦界を切り抜けては居るが、口や何かで言ひ盡くされぬ程の心の病があるのである。そして可惜青春の時代を他人の爲めの間斷なき獻身に費し、其の他人といふのが、一向自分のかける負擔の如何ばかりなるかを考へても見ず、唯斯く殊勝に盡くして呉

れるに對し有難うと言つて居るだけの事である。斯かる人は棕櫚の葉を頂かずして、殉難の苦節を忍ぶ人である。

勇々しくも殊勝の人の心ではないか。自己を犠牲とし、己を抑制し、而して日々其の抑制克己のつらさを感じて居る。——斯かる人は天使も、どの位の可愛がるか知れぬ。基督は如何ばかり恩愛の眼を垂れ給ふことであらう。萬事未來に至つて鏡にかけて見るが如き日になつたら、其の受くる報酬は如何ばかり多大なものであらうぞ。長の間此の現世で己を殺して仁を爲すの生活をして居るものは、世に爲す可きを爲し終へた曉に於て、報いを受くること如何ばかり多大であらうぞ。

O thou so weary of thy self-denials,

And fainting so beneath thy little cross!

Is it so hard to bear thy daily trials,

To count all earthly things a gainful loss?

What if thou always suffer tribulation?

What if thy painful heart aches never cease?

The gaining of the Quiet Habitation

Shall gather thee to Everlasting Peace.

五 精鍊者の火

神の子たる人間の惱める者にとりては、昔からよく引かれる苦患の比喩が、好い慰安になる。苦患の比喩とは、苦しみを以て精鍊者の火にたとへ、此の火を以て、神といふ精鍊者は金を純粹とするに見たものである。これは撒加利亞書に「我その三分の一を携へて火に入れ、銀を熬分る如くに之を熬分け、金を試むる如くに之を試むべし」とあるより来た比喩である。抑も基督の救濟事業には此の鍊金的方面もあることなるを、世人屢々之を忘却するのである。世人は基督といへば、何でも道に踏み迷つた者を救ふ人とのみ思つて居る。其れが爲めに基督の事業に等しく神聖且つ均しく必要なるものゝ存することを忘れる事がある。即ち基督は救はれし人を更に聖化するの任務をも帯び給ふものである。基督は十二分の贖罪を講じたしと思つて居られるのであ

る。精神の病を唯表面から上塗りかける様な事で止めて置く事をしないのである。基督は神を離れて迷へる者を、如何に遠くに迷ひ去つて居ても探し出して伴れ歸り、怎麼な深く罪に沈んで居ても、其れを高く引あげて下さる程の愛に富んで居られると共に、一方に於ては非常に神聖な方であるから、其の救はれし者に少しでも罪のあるのを大目に見ることをし給はないのである。即ち基督は救濟者たると同時に精鍊者であつて、「己の純なるが如くに純」ならしめんとて、被救濟者の一切の罪を焼き捨てんとし給ふのである。これが方便には種々ある。基督は先づこれが方便として、其の潔めの言葉を使用し給ふものである。——即ち其の妙例嘉範を引き、以て十分に人を引きつけ、或は心中に其の聖靈を宿らせ、或は啓發又は論議等の種々の外的なる手段に訴へ給ふのであるが、然し又自ら手を焼いて之を爲し給ふ事もある。苟くも神の子たるものは、此の自ら御手を焼き給ふ御手段が如何に清淨の力

に富むか、如何に忽ちに金と雜れる渣滓は之が爲めに姿をあらはして直ちに焼き盡くされるかを善く知ッて居るものである。

如何に善い信者でも、火で焼かれて渣滓が姿をあらはすまでは、自分でも案外なほど多くの世俗的な俗念の渣滓の心中に在ることを知らぬものである。ヨブのやうな希代な忍耐家ですら、試煉の火に遇ッては、彼れほどの不、忍耐があらはれたではないか。アサフの如き善人の心にすら、彼れほど神を無みする考が潜んで居たではないか。然し、斯く渣滓をあらはすのは、即ち之を除いてやらうといふ心から出たものである。故に人は火爐に入れられて、其の火の爲めに現はれ出るものを見て驚くことはあらうが、亦左様の時には、是れは神が自分の罪惡を一掃しやうと、今其の方法を講じて居られる爲めであつて、自分が神の永遠の賞を受く可き爲め『名譽の鐙がた』の中に流し込まれる前、先づ其の順序として神は自分を純金としやうとし給ふものである。

と考へれば、其れが却ッて慰めにもなるものである。

斯程ひどい訓練を施されねば、吾人は高尚な御用を務めることが出来ぬとは、吾人も何れほど反抗的で馴致し難き神の子供等であるか分つたものでない。然し兎に角、何等かの方法にて聖別されるといふことは、吾人から言へば仕合せで、神様から言へば光榮である。従ッて世には態々苦患を求めて一層純潔にして一層價値ある生活に入り、試煉の火の熱の少なからんを祈らむとして、反ッて如何な苦しみしても、如何んな火に遇ッてもよいから、罪の渣滓が十分に清められるやうにと祈り、斷末魔の苦しみに遇ッて、トーマス・アーノルドのやうに『余は苦を見る故に神に謝す』と言ッた人々も、これまで少なくなないのである。

本當に眞面目な人にあつては、何よりも罪を除かれんことが第一の願ひであらう。極樂が人を引きつけるのは、主として其の平和と光榮との爲めでは

なく、極樂生活の絶對的に無垢無罪なるが爲めである。ところが、罪が滅却するには、先づ罪を喜ぶ心が滅せざれば駄目である。果して然らば、罪を喜ぶ心を取り去るの効力ある現世の苦思といふことに無限の價値があるではないか。

精錬の作用は一朝一夕では駄目である。一時間や二時間では出来るものではない。随つて精錬のことは長い月日を要し、自然と信仰の念と共に忍耐の念をも試煉することになるのである。然し吾人若し惱める者に向つて『神と共に忍耐せよ』と言はば、吾人は又『而して神が如何に汝に對し忍耐なるかを思へ』と言はねばならぬ。神より苦患を與へられしものにして、いつまでも火より出されぬ者もあるが、斯く時間の長いことは、少くとも以上の理で説明がつくわけである。神は此等の人々を甚だ純潔のものに爲さんと思ひ給ふが故に、神は火熱を増しつて、終に熔解せる金の清らかな表面に神明自

身の御姿の見えるまでに及ぶのである。

基督教徒の中には妙な祈禱をする者が居る。其れを聞くと、如何にも神様は極樂の店を出して居られる方のやうで、信仰とか、忍耐とか、和順とか、愛とか、神聖とかいふものを束にして賣るやうに準備して居られるから、丁度化粧品店に往つて物買ふやうに、神様のところへ行つてあれを呉れ、これを呉れと願へば、直ぐ其れが與へられるものと思つてるやうに感ぜられる。然し基督教の神恩は決して其のやうに「オイそれ」と與へられるものではない。神恩を下さるのは訓練の結果である。而して訓練は大抵苦しいものである。神恩を乞ふ祈禱は素より應驗もあるが、其の應驗は訓練であつて、早速の施しではない。

さればと言つて、金でないものにも此の精錬作用は行はれるかと言ふに、左様ではない。本當の金でなければ、態々純粹のものにする爲めの勞力はか

けないのである。従つて、神から精錬を受けたいと思へば、先づ本當に神の子となつて居なければ、其の資格が無いといふことになる。神の子となるのは、試煉に由りて成るのではない、却つて、神が吾人を其の御姿に似たものとせん爲め、吾人を精錬し給ふのは、吾人が既に神の子であるからである。若し渣滓の中に本當の金が無ければ、態々火にかける必要はなく、又火に入れたからとて焼けるだけで、何の結果も出ては來ぬものである。

さればこそ世間幾分の非基督教徒にして惱みに在るものが、苦患の火を出で來つても、一向これまでと異なつた好い結果もないのである。其れは火は火でも精錬者の火ではない。又火の中に入れられるもの、必ずしも純潔となるわけのものではない。中には苦患の火を出で、ますます顔に成るものも居る。丁度煉瓦が窰の中から出たやうなものである。煉瓦には其の中に金がないから、之を精錬しやうにも、すべきものがないのである。自らの受くる

苦患の火が、本當に精錬の火であると感じて慰安を覺えるのは、唯神の國に在る子供等のみのことである。平凡なる基督教徒でも、苦しい試煉を経れば、非凡の聖人となり、非凡の大任を天より託せられることが、よく有るものである。今日、神徳の模範とせらるゝ人々は、皆苦しい試煉を経たものである。畢竟、非常の試煉があつたからこそ彼等も非凡の聖徒とは成つたのである。

シユーベルトは言つた、あれほど彼が書いた中で、一番よく出来たのは、彼が最も苦患を嘗めたる時代の作である。ダビデの詩篇パウロの書翰にありても理は亦一つである。詩篇の中で一等よく出来て居て讀者に補ひあるものは、心血を涙滴と混へて書いた時の詩であつて、パウロの書翰中にて最も感興多きものは、ロマの土獄より送つた書翰である。斯んなわけで、多數の人は、深き苦患の爲めに、常に基督の無限の恩徳を躬ら體認自驗すること多大なる而已ならず、亦神につかへ奉るの力を増し、御用を務めるの機會が従

ッて多いのである。若し其の苦患が左ほどひどく無かつたならば、逆も斯んな事は出来ない相談である。

精金壺の中に入れられて居る人は、不平を言ひたくなるものであつて、如何なれば吾を愛し給ふ神は、斯ばかり吾を苦しめて何とも思ひ給はぬことであらうかと言ふ。然し實は其の苦しみの火が消え、又は冷却するやうな事があつたら、其の損失如何ばかり大なるかを彼等自ら知らないのである。吾人には現在の悲しみが、終には仕合であることを見るの眼がない。然し吾人ばかりでない、誰とてエヂプトにある時、カナンを先見することは出来まいではないか。マラーに在る時、エリムを望見することは出来まいではないか。唯神は間違つた事は爲さらないものと信任せよ。神の勝手に爲さるまゝに御任せして、神の選び給ふ時機を最上の時機と信じて居よ。さすれば細工は仕上げで分る。かくて口には讚美の歌を謠ふやうな時が来るから。

使徒ペテロは流石經驗から確信ある巧いことを言ッて居る。彼は上述の事柄を簡潔に述べて下の如く言ッて居る、「汝等の信仰の試練は、無情必滅の金の試練よりも遙かに貴重なれば、たとひ火にて試みらるゝとも、エス・キリスト來臨の折は、賞讃と名譽と光榮とを博する種となりなんやう」云々と。

諸子果して斯くの如く精煉さるゝことを欲するか。渣滓が少しだも跡に残らぬやうに身から洗ひ落さるゝことを願ふか。果して然らば、諸子が平和なる天上の極樂世界より瞰下して、在世の折に苦みし長き試練訓練を回顧するの日到らん時、必ず巽の『精金壺』と『火』との爲めに滿腔の感謝を神に捧ぐることであらう。これは寸分の疑ひもなき事である。

Pain's furnace-heat within me quivers;

God's breath upon the flame doth blow;

And all my heart in anguish shivers,

And trembles at the fiery glow;

And yet I whisper, "As God will";
And in His hottest fire am still,

Julius Sturm.

六 雲に映れる日の光

虹は神の造り給ひしものゝ中にて最も美はしきものである。且つ昔ノアが此の先如何なる神の御審判を受けるやらと竊かに心配して居た時、此の虹を出してノアに見せ給うたといふ事は、是れ亦神の爲し給ひし最も美はしき事であつた。神がやさしくも斯かる慈悲の御しるしを思ひつき給うたかと思へば、ノアも大に心慰まれた次第であつて、其の後世々の人々是れに依つて慰めを得たもの亦數を知らぬ程である。且つ又、神が虹に就いて、「即ち我、雲を地の上に起す時、虹、雲の中に現はるべし、而して余は之を眺めて我が聖約を記憶すべし」と言ひ置き給ひしは、實に人情にかなつて居る。神の眼と吾人々間の眼とが同時に同じ虹を眺めるとは、——何んと美はしい考ではないか。然し、まだ之よりも慰め多き事がある。其れは神が人間の弱

盲目たる目で全く見えない虹をも能く見給ふといふ一事である。

此の神の慈悲の聖約の虹は、創世紀より黙示録に至るまで、聖書全篇を通じて現はれて居て、一方はアララットの水浸りの地面から、一方は光り輝く天の御座まで、聖書に限なく架つて居る。ノアの洪水の後、一千八百歳にして此の虹ふたゝび慰めの言葉となつて現はれた。即ち「この事我にはノアの洪水の時の如し、我むかしノアの洪水を再び地に溢れ流るゝこと無からしめんと誓ひしが、其の如く我れふたゝび汝をいさどほらず、再び汝を責めじと誓ひたり」とある。其の後一千八百年にして、此の虹は黙示録中の使徒ヨハネの幻となつて現はれて居る。曰く「其の寶座の四周に又二十四の寶座あり、二十四人の長老白衣を着、首に金の冕を戴きて其の寶座に坐するを見たり。」「其の坐する者の貌は、金剛石、赤瑪璃の如く、且つ其の寶座の四周に緑の玉の如き虹あり」と。斯くの如く神が昔、聖約を守らんと宣ひし時

示し給ひしるしの虹は、永遠に現はれるのである。此の黙示録の虹は、七色でなくて一色であるところが他の虹とは違つて居る。然し其の違つて居るところが、却つて其の意味をして炳乎たらしむる所以である。抑も聖書に見えたる象徴を讀むには、泰西人の見方では不可ん、これは東洋流の見方で行く可きである。然るに東洋流の考では、緑は信義忠誠のしるしと一般に認められて居る。人間の神に對する信義は、いつも失敗に終つて居る。何程えらい聖徒でも失敗して居る。如何に高尚な心がけの教父たち、如何に神聖なる使徒たちでも、失敗して居る。然るに神の自らの約束に對し忠實なることは、未だ嘗て異例がなく、又實際ある筈もない。

之を思へば、苦患に悩む一切の人々にとりて大なる安心と希望とがあるではないか。吾人は誰も陰雲なくして獨り虹のみを見んことを欲するものである。然し左様は叶はぬ。太陽も雲が無かつたら、其の光を映することが出来

す、神も悲しみといふ背景がなくなれば、其の愛を人目に示すことが出来ぬ。暗雲愈黒ければ黒きだけ、虹は愈美しい。依つて神が何故に雲をして人間の頭上を蔽ふこと、爾く陰暗晦暝を極めしめ給ふかといふに、是れ神が人間をして其の愛の愈疑ふ可からず、愈明白なることを見せしめんとすの御意に出づるものとも解釋が出来るわけである。

此の適例は之を極苦の試煉を経たヤコブの傳に見ることが出来る。彼は愛するラヘルに死なれ、シヨセフは人手にわたり、或は死んだとさへ思ひ做されてあつた。これが彼の頭上に暗雲の降りかゝつた始めであつた。次いで又別の陰雲が彼を蔽うた。即ち當時其の國に饑饉があつた。死の神は彼を始め其の一家を取り殺さうと待つて居るやうに見えた。斯くの如き時と雖も尙ほ雲の上に虹があつた。而して神は之を見そなはして居られた。それをヤコブは見る事が出来なかつた。ヤコブの如き涙に曇れる眼には其の雲と虹との

見わけがつかかなかつた。見わけのつかぬのは、畢竟其の雲が未だ虹を現はす程に濃くなかつたからである。そこで神は之をして益々暗黒の雲としやうとせられた。ヤコブは其の息子等をエヂプトに遣はしてパンを求めさせた。息子どもの歸りが遅いので、彼は氣をもみ出した。やがて還つて来たは来たが息子どもはシメオンといふ兒が牢に入つたので置き去りとして来なければならなくなつたといふ話をし、又エヂプト王は素氣ない挨拶であつて、且つベンジャミンを人質に取つたといふ話をした。之を聞いて親爺はガツパリと忍耐の膝を折つた。彼はベンジャミンと別れることは如何しても出来なかつた。ベンは愛兒中の愛兒であつた。彼は絶叫して『暗雲これよりも甚だしからんことを吾欲せず、ベンジャミンはやるまじき兒なり』と言つた。然し其の雲をして一層暗惨たらしめんとするが神の御思召であつた。ベンは到頭行かねばならなくなつた。老父は身も世もあらぬ思ひで斯う言つた『何とて

是れが我が爲めなるべき、斯くては老の身泣き死にすべし』と。

其の後幾週の間、陰雲は次第に濃密になつて、終に希望が全く絶え果てた時、始めて太陽は輝き出で、一切の暗黒を破つて虹が現はれ出した。『ヨセフは未だ生きて居ました』と聞いた時、彼は殆んど卒倒せんばかり嬉しがつた。虹は殆んど目を眩せんばかり輝いて居たのである。然し目をするて見てあれば見てあるだけ、次第に彼の確信は強固になつて、今は萬事『我の不爲めを計るもの』とは思へず、何事も我が爲めに働いてくれるやうに考へられるに至つた。而して今まで自分の爲めに此れほどの利益が計られてあつたとは知らなかつたと始めて悟るやうになつた。彼は是まで神が目をつけて居られたところを終に見得るやうになつて、餘ほど前から自分のものに成つてたもの、即ち神の御思召に任せ神に身を委ねると云ふ安心の状態を今初めて得たのであつた。畢竟これまで彼は自分の悲しみばかり見て居た間に、神が聖約を守

つて虹の出現を計つて居られたことが見えなかつたのである。神は今後とも斯く約束を守り給ふ御方なのである。

『わが忿恚あふれて暫くわが面を汝に隠したれど』これが陰雲であるが、『永遠のめぐみをもて汝をあはれまん』と云ふに至つて虹が見える。『われ彼等の罪に鞭を加へん』といふは陰雲だが、『されど彼より我が憐憫をことごとくは取去らず、我が眞實をおとろへしむること無からん』といふは虹である。

『主よ、汝若し此處に居まさらば我が同胞も死せざりしならんを』と、これは陰雲。『イエス彼に曰ひけるは、爾若し信せば、神の榮を見るべしと、我汝に言ひしにあらずや』と、これは虹。『現世にては汝等患難を受けん』は陰雲で『されど懼るゝ勿れ、我すでに世に勝てり』は虹である。『イエス曰ひけるは、我が爲すことを爾いま知らず』が雲で、『後これを知るべし』で虹になる。『故に爾曹今は悲みあらん』は雲で、『されど我復た汝等に逢はん、斯くて汝

等の心喜ばん』で虹に成る。罪であれ、悲みであれ、凡てどんな雲でも、神の宥免の恩徳と十全の安心との約束の虹で輝かぬ雲はない。

神の愛が映じなければ苦患に福は無く、日輪の光が當らなければ雲に虹は出ない。然し一たび雲に架したる虹の橋を見ては、其の雲をして光彩を放たしむるものを見て、最早雲其のものを見ず、唯虹のみを思ふのである。悲しみの上に架したる愛の光を眺める時は、其の悲しみは消え失せ、悲しみも『喜び』とかはるものである。固より虹が殆んど見えぬことがある。餘りぼんやりして判然しないことがある。然し雲が段々濃くなつて来れば、其の光彩も増すのである。神は何故度々吾人の陰雲を烏羽玉の夜の如くに、眞ッ闇にし給ふかと言へば、全く此の理由なのであらう。故に吾人は自分の眼で光彩が見えぬとて、神も見えぬと思つてはならぬ。神の御眼にはチャーンと見え居ると考ふ可きである。神は常に之を見えぬはして、『常に己が聖約を忘れ

給はぬ』御方である。

爰に心靈上にあてはめて大に参考になることがある。其れは、下界の吾人の眼で見れば、虹が半圓にしか見えぬといふ事である。半圓だけに吾人の見る虹は不完全な虹である。これは畢竟吾人々間は、地球の水平面上から虹を見る爲めである。山の高い峯から見た人、又は上空を翔ける時に見た人は、雲が足の下にも頭の上にもあつて、虹は圓く見ると言つて居る。今此の考を以て『寶座の四周に虹あり』といふ言葉を讀めば、地上では神の愛の全圓周を認めることの出来ぬ吾人も、一たび天上に上げられて、天の御座に坐することゝ免さるゝに及んでは、今見えぬものも悉く見え、『神の吾人を知り給ふ如くに吾人も知ること』が出来るやうに成るといふ眞理が分つて来る。嗚呼、悲しめる心を持てる人々よ、自らの高く上げらるゝ日到つて、神の愛の不完全なることを想像して居たのが皆誤りであつたと知れる日の到るを待

て。其れまでは神の愛の圓滿なことは吾人には分らぬ。吾人が天眼を得た時始めて之を知り、且つ驚き且つ喜ぶやう、其れまで取つて置いて在るわけである。天眼とは神の愛の中心、即ちイエス・キリストの御座より神の愛を眺める時の眼力のことである。

又爰に再思三考すべき事がある。吾人は陰雲の近づくを見て恐れを懐くが、其の通過し去つた後は、却つて其の爲めに神を讚美するやうな事がよく有る。是れ蓋し其の雲が散じたのは『吾人の頭上に祝福を下し』て散じたのであつて、吾人に審判を與へたのではないからである。雲が通過し去つて、静かな西の空に金色を現はして居る時、日光が之に映じて居るのを見れば、宛ら紫の空に天使の衣をひろげたやうに見える。之と同様に、吾人は肉體の重い病の兆候を見て、初の程は言ふ可からざる恐怖があり、且つ其れが兆候の確かなとなるにつれて度を増すのであるが、病患一たび去つては、神意に任せ奉

るの愉快が生じて、神の御使は吾に來り、吾が病床に周旋するの感がある。それと同様に、吾人の宿志の蹉跎する時、又は我が愛する者の迎も死より助かるまじきを知る時、吾人は身をふるはして驚き、狂氣のやうになつて、暗雲はまだ除かれぬのであるかと嘆ずる。兒の寢れし面影を見て、母は眼に涙を湛へ、兒の寢息を覗ひながら、初めて我が愛する者を吾より奪ひ去る吾以上の力強きものが世に在ることを知る時、又は苦しみに寢れし夫が、長が年連れ添うた可愛い妻の日に蒼くなり又瘠せ衰へて、自分が身がはりに立ちたいと祈る思ひを顔に讀む時、陰雲は濃く暗くして、迎も神様でも明るくして下さる事は出来まいやうに思はれる。其れでも終には涙に曇れる眼も、此の雲に映れる虹を見、やがて神愛が此の暗愴の裏に隠れて居て、其の慰安の力を發揮するの時機を待つて居ることを知るやうな例は幾らもある。

實を言ふと、神は吾人が心靜かに神の下し給ふ凶禍を忍ぶやうになるまで、

其の吉福を下すことを見合はせ給ふものである。如何に神力でも、吾人の心中にある基督的の要素を引き出すには、光を映す陰雲を其の方便に使はねば出来ないものである。エリザベス女王が、畫工に命じて自分の肖像を畫幅の上に寫して、毫も陰影を留めると言つたのは、正に技術の理法を無視したものである。それで畫工が左様の事は到底出来ませんと申上げたので、女王の逆鱗に觸れたといふ話がある。然るに、吾人の身を以て神に對し、此の女王の如き怒を發して、而かも女王ほどの無理を言ふが如きことが有りはしないか。

『神は雲を乗り物とし給ふ』といふ事が古い聖詩に見える。神が己の親しさものを訪ね給ふには、毎に此の暗雲の乗り物に乗って行き給ふものである。此の乗り物は、暗愴たる色を呈しては居るが、ソロモンの乗り物同様、『その内部は愛もて敷きてある』ものである。さらば神は此の暗愴たる雲に乗って、

何日何時でも來給ふを妨げないではないか。何となれば神が之に載せて連れて來たまふものは愛であるから、否、愛が神を失望者の許に連れて來るのだから。神の乗り物は暗黒でも、其の御召しものは黒くない。何故といへば、其の御訪問は愛を表する訪問であるから。又神の降終の際の御訪問が、矢張り此の雲の御乗り物であつても、是れ亦愛の訪問に過ぎないのであつて、其の御子を學校から連れ歸り『永く主の御もとに置かん』とて、喜んで吾等の處に訪ね來り給ふ次第なのである。

O Thou Who art our life,

Be with us through the strife;

Thy holy head by earth's fierce storms was bowed;

Raise Thou our eyes above,

To see a Father's love

Beam, like the bow of promise, through the cloud.

Sarah E. Miles.

七 『然り、夫れ斯くの如きは 聖旨に適へるなり』

天なる父神が其の御子等を訓練し給ふには主として其の命令に服従するを以て喜びとするやうに教育し給ふのである。然し亦其の意志に服従するを喜ぶやうに教育し給ふのが其の訓練の主要部分である。而して、かの基督は、神の完全なる御子であつて、即ち神の命令のみならず、其の意志にも、よく承服した好模範例である。

馬太傳を見ると、『其の時イエス答へて曰ひけるは、吾父なる神に謝す、爾は是等の事を智者と賢者と共に隠して赤子にあらはし給ふを謝す、父よ、然り夫れ斯くの如きは御心にならざるなり』とある。扱ても基督は誰に『答へ』給うたのであるか。天よりの聲にか、否、自らの胸に答へ給うたのであらう。

彼は其の時まで、まだ御自分の天職が甚だまづい結果になつたので、ひどく人間の失望といふものを感じて居られた。即ち己の愛に對する世間の反響が餘りあつて無いので、失望して居られたのである。されば基督も人情自ら『何故に斯かる結果にはなりたるか』と自問自答して居られたわけである。然し基督は己を此の世に遣はせし父に絶對に信頼し奉るもの、如く、面を上げ天を仰いで直ちに右の人間的の疑惑に自ら答へ給うたのである。

吾人にもよく有ることだが、基督も其の時、神の意志を解しかねて居られたのである。但吾人と違ふ所は、彼の神意に對する態度が吾人と違つて、批判的でなく、又不平の態度でなかつた事である。即ち基督の態度は、喜んで服従するの態度であつた。基督も人間と成られて居たから、矢張り人間らしい失望がちよつと心に起つたのであつたが、同時に之を緩和する思想が起つたのであつた。即ち『わが父の意志以外のことは、我與かり知らず、余は父

の意志に十二分の信頼を置かん』といふ考が起つたのである。斯くて直ちに其の信頼の念が感謝とも讚美とも成つて基督の口より發せられたわけである。

基督は模範だといふのは愛のことである。吾人は人生の失望に處すること當に斯くの如くなるべきである。吾人は失望すると、其の失望をして吾人の心を苦しませる事がよくある。而して神様は不公平だと口に出して啣つことはしないでも、不平の心から我知らず危なく口に出さうとまでするものである。

固より時たまには、失望の暗黒中にも、微かに望の光が見える事もある。希望の無くなつたに就いて、是は却つて神の御慈悲だと理窟をつけ得られぬこともなく、且つ其の理窟が自分に十分の安心は覺束ないが、心の落ちつきは少し位得られるだけの確かな理窟であるやうな場合も無いでもない。然し

其んな場合すら餘りたんとは無い。且つ理窟では心の惑を解く力が無い。これでは全で心内心外ともに光明が無い。斯かる場合にも基督の例が大に助けに成る。即ち何ほど眼を張つて見やうとしても、一條の光明も認め得ないで、何故吾人は神の御懲を受けるか、又其の御戒は何の爲めになるかなどと疑つて居る時に、吾人の病める心を抑へて、猶ほ一つ爲す可き事が残つて居る。而かも最も肝腎な用が残つて居る。其れは退いて、涙ながらに、吾を懲しめ鞭うつもの、愛の御胸にすがり奉り『されど亦可なり、父よ、斯くの如きは御旨にかなふらしければなり』といふ事である。

世に此の言葉ほど謙遜、神聖にして、最も敬虔崇敬に富んだ言葉は無い。元來、自分で説明の出来ないやうな失望に遭遇した時、吾人の當に爲す可き事は、之に逆らはぬ事である。以上の如き言葉は『わが意にあらで、汝の意を爲させ給へ』の如き言葉よりも崇高である。何となれば我意を通さず、神

の意を通せといふには、一方に安心立命があると共に、一方には葛藤煩悶の意味合ひが含まれてある。ところが、前の言葉にては雙方の意志が同じところを流れて居るわけである。吾人の當に爲す可きは、意志を棄てるといふことではない。——左様のことは、人間には出来ぬ。將た又神意に反抗しながら神意に屈することでもない。——それだけでは物足らぬ、即ち吾人の意志を神意の中に没頭させ、神意と人意と一つに成るやうにすることが必要である。神とても是れ以上の大教訓を吾人に授けて下さることは出来ぬ。若し吾人が真に神の子となれば、此の課程が十二分に履修せられるまで、神は之を授けて、吾人を訓練することを止め給はぬことであらう。

然し、時々自分の周囲を見廻すと、神の攝理は、吾人々間の豫想に反して行はるゝのみならず、吾人が當然斯くある可しと信することに反する事などもあつて、随分妙な工合に行はれるのを見て、吾人の信仰が躓くことも折々

ある。何故なれば、甲の一家は毎年々々絶えず悲惨が打ついき、乙丙其の他の家は、全く左様の事がないのであらう。甲は何を爲しても不運ついきであつて、其の人よりも正しからず、又謹慎ならず、又伶俐でなく、且つ彼よりも神信心が多くな、——恐らくは彼に劣つて居ても、他の人々は始から終まで、家運の傾くやうなことがないのは、一體どうした事であらう。死に神の手は、強い人間を打つて、弱いものは見遁すやうな事がある。是れも何うしたものであらう。何が故に年若いものが、これから先、益に立たうといふ時に、無残の暴風に散るのであらう。神は年若いものに對し、これから神の御用を務める爲めに、特に準備をさせて居られたのではないか。其れを今折角御用をつとめるまでに漕ぎつけてから、俄かに其の邪魔をして、其の代りに年老いたものは、幾年間も無益の生涯を送らせぬふは如何なる故であらう。年とつたものこそ既に働きも出来ないで、丁度、淺瀬に乗りあげた廢船

同様、段々に破碎しつゝあるではないか。何が故に父なり母なりの世話が一番要る時に子供は孤兒とされるやうな事があるのか。又は其の子等が丁度可愛くなる盛りといふ時に天逝するのであるか。何故に最愛の友及び一家の杖とも柱とも頼むものを、死は吾人より取り去るのであるか。是非誰か命を取らなければならぬとしても、さういふ者の命を取って、吾人に極痛を負はせずとも可かりさうなものではないか。

斯かる疑問を列べて來ると、如何しても理窟では解せなく成る。斯うなると、唯信仰の他は無い。理窟の眼で見えぬ時は唯信仰で神にすがりつき、涙痕斑らなる顔を上げて神の御姿を拜するやうな人が、此の時「然り、夫れ斯くの如きは聖旨に適へるなり」と言ふのである。

イエスが、其の信仰の心から神意を疑うた自分の心に自ら答へたのは、斯かる答へであつた。而してイエスの一語「父よ」で、吾人は其の心中の落ちつ

きを學ぶことが出来る。イエスが目をあげて此の疑問の天意の方面を見わたした時、彼は「天地の主」が、其の不屈不撓の意を遂げつゝあることを見た。否、彼の見たるものは、其れ以上のものであつた。即ち彼の見たる顔は、單に主君の顔でなくて、父の顔であつた。神の高き意志は、父の意志であることを見たのであつた。「わが父は愛なれば、吾が爲めに最も善き事のみを計らひ給ふめり」とは、基督の心中の、最も深き確信、最も深き安心であつたのである。彼は他の人に知られぬ「父が父を愛する事を知つて」居た。是れ彼が極度に神に信頼し得た所以である。不肖ながら吾々とても幾らか「父神を知ること」は出来る。而して知れば知るだけ、神の爲され方が解つて來ての吾人の安心の落ちつきでなく、父たる神格が解つて來ての安心といふものが出来るやうに成るのである。

使徒ヨハネは、其の當時の苦患に悩む信徒どもに向つて、「わかき兒等よ、

吾この書を爾曹に書きおくるは、爾曹父を識れるに由る』と言ったが、今日の吾人の間に、彼をして在らしめば、彼果して能く幾人に向って同じ事を言ふを躊躇しないであらうか。兎にも角にも、基督の如く天に在す父の御顔を常に眺めて居るものゝ面は、どんな涙も忽ち拭ひ去られてしまふであらう。

One prayer I have—all prayers in one—

Since I am wholly Thine;

Thy blessed will, O God, be done,

And let Thy will be mine!

八 悲みの人

『悲しみの人にして病患を知れり』とは、イスラエル人が由つて以て救世主を識別することゝ成つて居た表徴であつた。此の表徴は、ナザレのイエスに當て候つて居たのであるを、當時の人は盲目であつた爲めに其れが見えなかつたのである。イエスがキリスト（救世主）としての光榮と慰安とを有して居た事は、彼が人間界に人と成り、人生の無明の方面に關する全ての事、並びに人生の試煉と其の誘惑、人生の失意失望及び其の苦難と涕泣とを、自ら経験して人生に始終した人であるが爲めであつた。而かも我が大救世主は、堅忍にして神に信頼し、吾人の爲めに丑三の如き暗黒の境涯に在る時の希望の星となられたのである。基督は斯くの如き助力を人間が必要することであらうと先見し給ひ、而して是れだけの助力あらば、人間には十分だと考へら

れたのである。『現世にては汝等苦難を受けん』、されど『僕は其の主の如く、弟子は其の師の如くならば足りぬべし』、『若し人、主を呼びてベルゼブルと云はば、況して其の家の者をや』と馬太傳第十章廿五節に見えてある。此の教訓を會得出来る弟子は果して幾人あるだらう。さればこそ世人は驚いて、迎も駄目だと落膽するものも有れば、甚しきは十字架の負擔に堪へずして、反抗を基督教に試むるに至ることすら有るのである。

諸君は恐らく、現世に於ける諸君の位地の低きことに不平を懐くことであらう。然し諸君は初めの出方が悪い。初めに既に地の利を失つて居る。諸君の徑路には初めから不利の弱點がある。それにしても、諸君は實際、主キリストよりも以下の境涯で生れたのでは真逆あるまい。キリストは天の王冠と光榮とを持つた方でありながら、天使にだもあるまじき身の落し方をして、牛馬と共に旅宿の馬小屋の内に生れ給うたのではないか。

又諸君は、他人より虐待せられて不平を訴ふるかも知れぬ。然し、此の點から言へば、諸君の不遇は、主キリストの不遇に較べては物の數でもない。時々人は人がキリストを持って唯すやうにも見えた。然し彼等人民がキリストの四周に集まると、彼等はキリストに施しを爲すは扱て置き、却つて其の功德を請うたものである。時々、富者などが宴會にキリストを招くことがあつたけれど、これは彼に親愛の意を表はさん爲めではなくて、唯自ら尊大の振舞をして喜ばん考であつた。これは基督も明かに看破せられたことであつたが、此の如き接待振りの裏面には唯好奇心、若くは檀那的の驕矜心といふ、つまらぬ心が有つたものである。故に基督は幾年かの間、たい僅少の人々の布施で衣食をして居たのであつて、其等の人々が『基督に衣食を供給して』居たのであつた。彼は野の狐、空の鳥よりも家内にて撫育せらるゝことの劣つて居た人間であると自ら言つて居る位である。其れにしても、彼は少しも

不平らしい事は言はなかつたのである。蓋し彼は己の斯くの如くなるが己の天分ぞと考へ、之を己の父神の意志と見て之に承服して居たのである。諸君果して自己の經驗を以て此の主キリストの經驗に比し、『救世主より余は不遇なり』と言ふを得るか如何。

諸君は言はん、余の不遇や忍び難きものに過ぎたるものあり。例へば深くたくみし加害侮辱の如き、讒言、誹謗の如き、無禮、凌辱、さては身に覺えも無き事をいひかけて、吾を陥さんとする毒々しき陰口の如き是れなり』と。よし、さり乍ら基督は左様な事は無かつたか。如何に忍耐がしにくいとて、基督ほどの事はよも有るまい。彼の純潔なる動機は、故意に誤解せられたではないか。彼が愛の一念より行つた有り難き奇蹟は、魔を使ふものと言はれたではないか。彼は反逆の徒を以て目せられ、潰神者として見られたではないか。彼は饕餮者と陰口せられ、又泥酔者と言はれたではないか。凌辱

を極めたる悪名は、日ごとに彼の頭上に浴せかけられたではないか。其れでも怒つた言葉としては唯の一度も彼はおくびにも出さなかつたのである。彼は己を責むる者は固より、己が弟子たちに對しても、斯ばかりの忍耐をせねばならぬ事かなどと啣つことは無かつたものである。彼は心靜かに言はれるまゝに耻辱の言を聞き捨てにし、『正しく判き給ふ天帝に身を任せ奉り』て居られたものである。

基督の弟子にして、彼に忠勤を擧ぐるが爲めに苦難を受け、其の忠勤の爲めに世の惡しみを蒙り、友より迫害と侮辱とを受くる者には慰安必ず之あるべきである。主は戒を弟子等に與へて、現世にては彼以上に世に愛せらるゝことなかるべしと明言して居られる。即ち『若し世人にして余を惡まば、亦汝等をも惡むべし』、『それ吾が來れるは、人を其の父に背かせ、女を其の母に背かせ、嫁を其の姑に背かせんが爲なり、人の敵は其の家の者なるべし』

と書いてある。此の種の苦難は、何ほどひどくても、吾人は敢て驚くに當らない。蓋しこれが即ち神國に入るの課程であるから。

吾々の主に對し奸計を弄して、以て此の苦難を避けることは容易であらう。即ち若し吾人にして、世の罪惡に對し、進んで反抗をして世を騒がす様な事をしないならば、吾人は當に惱まされる様な目に遇はないで済むばかりでなく、更に慈悲に富めりなどと賞讃され、狄量ならずと褒められ、基督教徒の好模範ぞと世俗に持て囃される事であらう。之に反し、世俗に惡まれた基督の眞の弟子は、矢張り世俗に持てないであらう。世俗は千九百有餘年前に基督を迫害した如くに、今日も其の弟子等を迫害するであらう。而して其の迫害の用具は、昔と違つて、火や劍ではないであらうが、實はそれよりも及が鋭く、其れよりも創痕が深く残るものである。

左程の苦難を受くる弟子たちに對し、基督は如何なる慰安をか與へ給ふの

であらう。先づ基督の御言葉に依ると、此の如き苦難を受けてこそ始めて基督の弟子たるの證據は擧がるわけである。「余は汝等を世俗の外に選み出したれば、世俗は汝等を憎むなり」と言つてある。弟子たちは、世より惡口せらるゝの苦しみは免れまいが、其の代りに神に祝福せらるゝことは疑ひない。これが『神の子』の神の子たる所以である。又第二に、基督の弟子たるものが、斯くの如き迫害に遇ふのは、即ち其の名を天に記されたる、綿々として光榮ある豫言者の中に列する所以である。『さればこそ、世俗は汝等以前の豫言者をも迫害したるなれ』と書いてある。又第三に、現世にて十字架を負ふといふことは、取りも直さず未來にて冠を戴くの歩武である。『基督の苦しみを共にすること大なれば大なるだけ、汝等以て喜びと爲すべし、そは彼の光榮あらはるゝの時、汝等また限りなきの喜びを感ず可ければなり』とある。天上の五分間は、現世五十年間の苦難を償つて、猶ほ且つ餘りあるものであ

る。
 基督を悲しみの人と思へば、亦此の外にも無限の慰安がある。それは人の悪意より來つた苦難でなく、直接に神の御手より下されたものに悩む場合である。此の如き場合にあつても、基督の例を思へば、亦慰安になる。即ち基督の苦患の最も苦かりしものは、唯天なる父の鞭うちによる苦患であつた事を思ひ出すので、吾人は慰められるのである。何故に彼は「我が神よ、我が神よ、何とて吾を見捨て給ふぞ」と叫ばれたのであるか。而して「蓋し彼の苦しきは、神の御思召に出でしものにて、神は彼に悲しき目を見せ給ふなり」とあるのが、即ち右の疑問に對する答である。基督の臨終の際の悲しきは、人が彼を悪口して居たからでなく、將た又弟子たちが彼を見棄てつゝあつたからでもない、全く神様までが彼を見棄てなされるやうに思はれたからである。彼は既に現世より受くる悲しみも經驗し、地獄より來る悲しみも經驗し

て居たものであるが、天より來る悲しみは、彼の最後且つ最深の悲みであつた。前記の叫びは、實に心靈が神に見離されたるやうに感じて、心靈の底から彼が出した聲なのであつた。基督の弟子たるものうち、果して幾人かよく斯かる悲しい目に遇つて、而かも基督の如く、よく之を切り抜けて安心立命に達することが出来るであらうか。定めし諸君は言ふであらう、「外の悲しみならば、何でも我慢が出来るが、神様の御顔が見えなくなつて、祈つても神の御答が無く、自分の希望も無くなつて、見棄てられた人間に成つたと思ふと堪へられない」と。氣の毒千萬ではある。十字架につけられし時の基督の悲しみが、正に其れであつたのだ。そして諸君も「わが神、わが神、何とて吾を捨て給ふや」と姿をかくし給うた汝の神の御耳に向つて絶叫せねばならぬ様な事になつても、其の神に見離されたといふ感じ工合が、基督に比してひどからう筈がない。何となれば基督が永久に神の愛から棄てられた様に

感じた時に比較しても、諸君より基督の方が、もつと神に愛せられて居た筈だからである。

世間には護身符や呪符を携へて、一切の災難除にする人が少なくない。然るに、此處に一つ喪心苦慮を除ふこと疑ひなしの御守が有る。吾人若し之を携へ之を肌身離さず大切にして置けば、必ず其の効驗がある。これは他でもない、——基督を思へと云ふ一事である。而して人生の苦患の故にて氣落ちをした時は、いつでも獨り自ら言へ、「若し基督にして全然余と同じく試煉と誘惑とに遭ひ給ひしものとせば、如何ばかり彼と余とは爲めに相近かるべき」と。痛める心の人々よ、諸子が荆棘深く鎖すところを一足／＼に血を流して通り行くとき、血のじめる草の上に自分以外の人も難儀をして、此處を通つた跡方の有るのを見、其の人は何人であるかと尋ねて、諸子の主キリストの足跡なることを知り、其れから「心を裂く苦しむする時、悲しみの人亦吾

と共に此の苦しみを與にす』と感ずるは、如何ばかりか諸子の慰安に成る事であらう。基督の心情ほど、絶り奉るに善きは無く、基督の模範ほど習ふに善きは無い。

人の心靈と其の救済者とは、互に相適合するやうに神様が造つておいて下さつたものである。救済者の方では、人の悲しみの時に初めて救済の機會を得、また此の時始めて悲しめる魂は其の安住所を得るのである。彼に學び則とする時は、吾人は悲しみの境涯を逸脱して靜穩なる信仰の境涯に入るの道を會得し、又終には之より超越して、安穩なる極樂淨土に達すべきの道を心得るやうになる。

O Thou who died'st to give us life,

Full well to Thee is known

The Cross, and all the inner strife

Of those who weep alone,

And 'neath their burden well-nigh faint :
The aching heart's unspoken plaint
Finds echo in Thine own.

Paul Gerhardt.

九 營々たる苦役

惱める心の人々に慰安の言葉を陳ぶるにつけても、思ひ起すは賤役に従事せる多數の人々のことである。彼等は烈しき肉體の苦しみに悩まざるゝ事は無いが、毎日々々同じやうな面白からぬ苦役をして、つまらぬ家事向きの心配や苦勞で、年が年中、暇もなければ氣根も盡きて、今少し偉い事をして見やうとしても、其の餘裕がなく、又實際やッて見た處で大した結果も得られないのである。斯ばかり惱める心を持った多數の人々は、毎日々々自分の腑甲斐なさに齒ぎしりしつゝ、早く負擔が我が雙肩より取り去られたらばよいと、願ッて居る。而かも其の願ひや、決して自分一身の安樂の爲めではなく、今少し人生の高尙なる目的を果たしたさの一念に外ならぬのである。彼等とても進んで人生に益あることを爲し、以て神の光榮をあらはし奉らんが爲

めに、現在以上の事を爲したいとは思つて居る。然し彼等は日々の務に繋がれて、何をして見ることにも出来ず、爲めに我が一生が如何にもつまらぬもの様に見え、又、無益且つ下劣の一生のやうにも思ひなされるのである。

自分は處を得た生活をして居ると、實際に信じて居る人は、世間にさう多くは無きものである。誰にしろ、今少し自分は幸福又高尚な生活をする筈の人間では無かつたかしらんなどと、銘々夢みたやうな考を持つて居りはしないか。又時には左様あるが至當ではないか杯と考へて居はしないか。時には吾々籠鳥の身を以て心から悪々しさうに籠の戸を黙つて打なぐつて見る事もあるかと思へば、又時にはがっかりして身の腑甲斐なさを嘆じ、危ふく絶望の淵に陥らんとする事もある。斯くて人生は死ぬにも死ぬぬ苦しみの朝夕と化し去ることもある。

然し試みに思へ、神は用もなき地位にわざ／＼吾人を置き給うたのであら

うか。神は左様な不公平、又は不親切な事を爲されたものであらうか。それは兎も角も、吾人の唯今の境遇に於て神と基督との御用が務まらさば、何處に置かれたとて矢張り御用は務まるまい。若し吾人が今のやうな狭い見すばらしい場所に居るのは、眞に神の所爲であるとすれば、定めし其の地位は自分にとりて最も善い地位であつて、且つ其處にて忍耐して神命を奉じ、以て神の光榮をあらはすのが神意にかなつて居ることであらう。神が茫々たるアラビアの砂漠に四十年ばかりもイスラエル人が彷徨ふことにつき、昔イスラエル人に告げ置き給ひし御言葉は、吾人の如く現在の苦楚辛酸と失望との境遇に在るものに對し、今日も繰り返されつゝあるのである。其の言葉に曰く、

『余が汝等を今苦患にならすは、後に至つて汝等に覇権を興へんが爲めなり。又汝等をして埋れ木の一生を堪へ忍ばしむるは、後に汝等を花咲かせん爲めなり。又些細の事にも忠實なるやう汝等を訓練するは、他日大事を執掌する

に足るものとせんとてなり」と。若し吾人基督教信徒として、何よりも先づ知らざる可からざる實際的事ありとせば、そは他でもない、即ち神に吾が一生を捧げて如何なる職業も之を美化し、神聖化するの一事は、是れ風雲に乗じて一時の燦灼を逞しうするよりも遙かに難く且つ遙かに名譽とするに足る事柄であると云ふことに外ならないのである。疲れあぐみて喪氣せる汝の心情をして、其の頭をもたげて天を仰がしめよ。吾人の一生を司る主人は、過の無い方である。彼は吾人銘々に適當の地位を守らしめ、相當の業を爲さしめ、相應の任務を負担せしめ、斯くて之を爲し遂ぐるに相當の助力を與へ、終に吾人が神の爲めに其の任を全うすることが忠實ならば、其の任如何に微々として世に知られざるものであつても、任果てたる上は之に相當の報償を與へたまふものである。

諸君、現下の面白からざる務、平凡なる境遇、日々食ふものも碌々食へぬ

境遇、これこそ却つて諸君の爲めに神が殊更に選びて與へ給うたものである。これこそ諸君の爲めの天上教育の機關である。神恩流通の定道である。神の愛の聖餐禮である。諸子の繋がれたる地位、諸子の汚れたる町、諸子の矮小なる住家、車馬の音喧しき事務所、景氣のわるい店頭、寂しい通り、性の合はぬ交際、——是れ皆諸子を訓練するの學校であつて、神意に従つて諸子の犠牲を奉ず可き祭壇なのである。試みに今我が言を信せよ。而して自己の境涯に安んぜよ。然らば諸子復び是等を觀するに當りて、必ず以上のことに神の愛のあることを明かに看取し得て、不安は安心と一變するであらう。

其の他人生に失望の事も有るが、亦同じ道理である。世に失意の人は數かぎりも無く、又其の失望の事柄も、必ずしも外面的の事柄のみではない、精神的なものも有るのである。互に今よりも愛し愛されて暮りたいと思ひながらも、片思ひで過ぎさねばならぬ人が幾人あるか分らない。何の過も無いの

に、最も深き最も純潔なる交りを絶たれて居るものも随分ある。一方に『目出たい三々九度』がある爲め、一方では夢想の花嫁を失ひ、意中の花婿を失つた者が出来る事も、何の位あるか知れぬ。然し獨り淋しい道を辿つて暮らさねばならぬ人々々々とも、何も其れが爲めに是れから先、人を愛し又は人に愛される事の出来ない人間と成つて了ふ必要はない。又實際、事實は却つて其の反對になるものである。而して多數の人に對し、博く愛を施すことの出来る爲め、多數の人の制限なき自由の愛情を受ける事が出来るものである。即ち彼等の愛は舊と違つて、今は一人にのみ専らでないから、擴がって多數の人に及び、多數の人も、之が爲めに愛といふものゝやさしく且つ獻身的なる事を始めて知ることが出来るやうになるのである。

此の章を書いて行く中にも、自分の思ひ出すのは、一人の極めて眞率素直にして、而かも愛すべき基督信徒のことである。それは女であつたが、家事

の爲めに忙殺されて、今少し有用な生活をと思ひながら、其れが意のままに行はれ難いので、時々氣も心も盡きたやうになる事があつた。國內又は他國の女にして、基督教に身を獻げたものが、基督の爲めに殊勝な事業をして居るのを物の本などで讀んでは、切りに嘆息をして『それなのに、自分は全く何も仕出來さないと』と言ふのであつた。固より恨みつらみは並べなかつたが、其んな事を思ふと唯悲しく成るのであつた。尤も此の女は、自分が仕合せである事を知らず、自分の美はしき生活の爲めに他人の生活までも何の位幸福にしつゝあつたかを自ら知らなかつたのである。即ち此の女は日々夫の爲めに力とも喜とも成つたのである。彼は自分の家庭を極めて幸福にして且つ愉快なるものとした。彼は自分の子供を教育して、全て純潔且つ高尚なる事を愛せしめ、これに道義と同情とを教へ、又獻身と眞理とを説き聞かせた。終に子供等は一人残らず起つて、母の徳を頌するに至つた。且つ此の

婦人は、遙かに其れ以上の事をした。彼は自分の家庭以外の多数の人を救済したのであった。尤も何の位多数の悲しめる人々を慰め、如何に多数の貧者ををして、此の世に此上なき慰安者を得たることを神に謝せしめ、如何ばかり私を捨て、一生を送つてゐるか。又どれほど彼の實踐躬行が多数者をして彼の救済者を己等の救済者としたものであると思はしむるに力があつたか、其れ等のことは此の婦人自身では知らなかつたのである。斯くの如きは彼の神に對する日々の奉仕であつた。其れは人の耳目に聳えない奉仕の生活であつた。けれど福祉を以て終始一貫したのである。

又余の思ひ出すのは此の外にも同じやうな神聖なる精神を有つた多数の人々が居ることである。即ち直ぐ傍らの人々以外には見知り合ひも無く、寂しき病床に病に臥して居る人々のことである。彼等は去年と送り今年と迎へて、心配苦勞の絶える間がなく、年百年中、精神の落ちついたことがなく、世間

で慰みとか成功とか云ふのは何の事やら知りもせぬ。それでも彼等は辛い己が分に安んじて欣々然として居る。而して僅かばかりの天分を授かつて居ながらも、之を爲し果して、若し神の御意に叶はば其れで満足をして居る。斯くて日々最も悲觀的な境涯に在りながら、眞に神の御用を務むる精神の美はしさと香しさを發揮し擴布しつゝあるのである。

余は今此等の人々の事を思ひ、又斯かる人々の多数なる事を思ひつけて居る。恐らく吾人の案外に思ふほど、此等の人々は世に在ることであらう。思ふに彼等は天使に迎へられて、悲しみを知らぬ國へ入れられ、其處に星よりも輝きわたることであらう。之につけても思ひ出すはイエスの言はれた御語である。曰く『後の者は先と成り、先なるは後となる可し』と。

We need as much the cross we bear

As air we breathe, as light we see;

It brings us to Thy feet in prayer,
It binds us to our Strength in Thee.

十 「爾のかくまひ給ふもの」

此の語は聖書全體の中にて最も美はしき言葉であるが、唯詩篇第八十三篇にのみ出て居る。尤も同じ思想は何處にも散見して居るが、これほど簡潔且つ美麗に言ひ表はしたのは無い。これは一方に隠蔽の意味があつて、一方に安全の意味が含まれてある。而して隠蔽は往々にして安全の手段である。

其の好適例は教會史である。第一、ノアが函舶に乗せられて、戸をピシヤンとおろされたので、ノアは即ち神のかくまひ給ふ者と成つた。かのオバディアが、親切にもアハブに見つけられぬ様にかくまひ給ふ者として、二つの洞穴に入れて、毎日食物をあてがってやつた百人の豫言者どもは、亦神のかくまひであつた。又スコットランドの狂信家カペナンターの徒は、山間の澤地にある龍騎兵どもから追かけられる時、濃霧俄然として起り、お蔭で命を助かる

やうな事がよく有つた。即ち彼等は敵の目を避けた爲め敵手に渡らなかつたのである。これが矢張り神のかくまひであつた。

尙ほ又斯くの如きかくまはれたる者が世界には随分居て、貧乏したり、病身であつたりして、其の名世に聞えず、自己の病と悲痛との中に閉ぢ込められ、爲めに世間の仕事にたづさはらずして、閑散の生を送り、唯神にのみ知られて世に知られず、而かも此のかくまひ同様の隠蔽生活に於て、却つて幾多の危険を免れ、此の隠蔽墮滅の境涯にして、始めて得らる可きの安住を得ることが出来るのである。此の意味で言へば、神の聖徒高德等の大部分は、皆神のかくまひでない者はないと言つても宜い。世には熱心なる基督教徒にして、多忙なる俗務に鞅掌し、又は名譽の高地位に在るものも少くはない。然るに此等の人は、皆其名、世に聞えて萬人に識られ、其の功名例へば丈高き蠟燭の火の如く、遙かに且つ廣く其の光彩を發射して居る。彼等の地

位の著明なるにより、其の基督に弟子の禮を取るを見て、世人は驚くのである。處が大抵の基督教徒は、社會上の地位が甚しく低い。『多くの高貴の人々は、信仰に於て富めりと稱せられず、此の世の貧しき者を神は却つて信仰上に富者として選み給へり』と書いてある。而かも本當に金を持つてる者は滅多にない。如何に其の基督に献身して盡し奉ること熱心であつても、金持ちに成つて金を蒔き散らすことは殆んど無い。彼等も他の人々が金銭を湯水の如く蒔き散らすを見て、金が欲しいなアと思ひ、金があれば之を使つて我が主キリストの御用に立て、見せるにと思つて居る。處が世の中の富は、大部分は彼等の手中には無くて、世俗の人の掌中に在る。基督の爲めに金を使つて見やうといふ心懸けのある人に限つて、其の金が少しも無いといふ始末である。そこで多數の基督教徒も埋れ木の生活である。——依つて矢張り神のかくまひである。

處が、聖徒の高徳なるものは、往々斯ういふ連中から出る。彼等は恰も谷かげの姫百合の趣がある。見てくれるものは唯神と天の使とである。又は之を砂漠の中に生えるといふ甜瓜の、砂地に隈なく芳香を放つにも譬へやうか。五十年に一度も人の子一人側を通り合はすものも無いのに、猶ほ其の匂りを失はないのである。又は之を百姓小屋などで人のよく見受ける不ざまな古時計にも譬へやうか。外側は古ぼけて垢だらけでも、又年百年中同じ隅っこに立って居て、のろい單調な重もさうな響を出して鳴って居ても、爲るべきことはキチン／＼とするし、未だ不忠實であつたり間違つたりした事は一度もない。あはれ立派な基督教的精神を有しながら、藁屋の内に隠れ、天には知られても世には知られず、神の御覚えはめでたくても、世間の人には褒められもせぬ人々が幾人居ることであらうぞ。

神は暗きに隠れたるを明るみへ出す御方であれば、萬事鏡にかけて見るが

如くなる審判の日に至りて、神が是れまで暗やみの内に圍まはれて居た聖徒たちを、俄かに明るい處へ出し給ふことあらば、如何ばかりの恐懼が起るであらうぞ。基督出現の日を當てにして多くの愉快な希望が繋がれて居ることであるが、中にも最も愉快なのは他でもない、『神の諸子の顯はれん』日の其の時至らんことである。とは又何の意であるか。神の選民の召還のことか。然り。埋められし者共の生き上がるることか。然り。四方に散じたものゝ集まることか。然り。惱める者の賞せらるゝことか。然り。悲しめる者に喜びあることか。然り。至て皆左様である。然し神のかくまひ給ひし者どもの顯はれんこと、是れも亦其の中に數ふ可きである。

そこで吾人は最早名の顯はれざることをつぶやくには當らない。煙滅は圍まはれである場合が多い。谷かげに咲く花は、平地に出たら霜にいためられ、焼く日に枯らされるであらう。世に名を知られず又は長く苦患に惱んで居る

といふやうな爲めに。却つて神の花園のめぼしき花が不意に折られることを免るゝの例は乏しく無いのである。かくて一たび其の保護の爲めに最早蔭が必要でなく成つた曉に於ては、是れまで蔭の下で養成し得た美觀を發揮するのである。故に蔭の下に堙滅の生活をして居る時、決して不平などを言つてはならぬ。寧ろ鞭たれても親の杖、苦しきを忍びて却つて喜び、神は親切にも我が身の心靈を烈日の暴威より保護して居られるものと感謝す可きである。

諸君にして若し尙ほ屈辱堙滅の迫も堪へがたきを思はゞ、試みに諸君の大師キリストを見よ。キリストがナザレの茅屋に世間を餘所に住みわび給ひしこそ誠に二十八年が間であつて、其の間雲霞の聽衆を前にひかへて道を高壇に説く的機會なきに非ずして、而かも彼これを能くしなかつたのである。全土に遍満す可き光明をば、何とて斯くは長らくかくまつてあつたものか。曰

く、他なし、此の間に『彼は苦しき事を忍び、耐へがたきを耐へて、従順の徳を養ひつゝ』あつたのである。即ち待つことを學んで居られたのである。堙滅の境涯に満足することを學び、神意に任せ奉つることの稽古をして居られたのである。神の爲めにえらい働さぶりをしたいと苦心焦慮しながら、事志と違つて無爲に世を過ごさるを得ざる多數の人々に同情する稽古をして居られたのである。嗚呼、自分が狭い活動の舞臺に限られて居ること、縁の下の方持をして居ることを啣つたり、又は自分よりも力量が無くて、其のくせ社會又は教會に於て自分よりも有力なる地位を占めたる人々を見て羨望の念を起したりするやうな、凡て左様の不平の徒にして、一たび天より來臨し給ひし基督すら二十八箇年間も（而かも享年三十有三歳のうちの二十八年）世に埋められ、其の名の聞えざるを恨みとせず、神の御目つきに注意し、神の御手の指圖を待ち、宛然天使が天國にて神側に奉事するが如くに、眞率

且つ愉悅の心を以て神命に従って居られた事を思へば、是れ實に其の好個の模範たる可きものである。

鄙の伏屋に世を佗住みの境涯を忍んだからこそ、カルバリー山上の露と消えて世を濟度すると云ふ大從順が出来たのである。吾人の生活にはナザレもあれば、ゼルサレムもある。而して前者は後者に至るの準備とも成り得可きものである。但し先づ神意の如何を問はず、之に十分に服従して些の不平なきやうに稽古をして置かなければならぬ。基督が世に出で給ひし時は、低い身分であつて、而かも之に安んじ、喜びを以て終始し給うたのであつた。基督が求めてこんな低い生活を送られるやうに成つたのであつたとしても、斯ういふ様に世を住みなす事は、誠に神徳の生活と謂つてよい。天に至るの門は却つて此の方に向つて開かれてあるものである。唯單に「圍まはれた者」となるだけでは、一向喜ばしい事も無いわけだが、神様の圍まひに成るとい

ふ事、即ち神の爲めに神にかくまはれ、而かも神と共に世に隠れて居ることは、此の上もなき喜びが其の中に有るではないか。

Sweet lives pass on ; the world may never miss them,

And souls, though bright, may shed no dazzling ray ;

But God will know exactly where to find them

When He makes up His jewels in His Day.

A. P. O'Donoghue.

十一 暗中の危険

暗闇には特殊の不安が有るが、また其の危険も有る。『なんぢ黑暗をつくり給へば、夜あり、その時林のけものは皆しのび／＼に出きたる』と詩篇に出て居る。自然界に於ては全く此の通りであるが、心霊界の経験に於ても亦同じく其の通りである。苦患悲痛の暗黒が人生を襲ひ來る時、心情も亦其の襲來を蒙むり、心情界の潛惡一時に騒ぎ立つのである。——例へば神を惡しざまに思ふの念を懷き、又は苦痛悲哀の本を爲したる人、又は之を爲したりと自ら思ひなしたる人に對し、烈しき憤怒の情を持ち、又は氣むづかしく短氣になり、又は萬事疑ひ深く成り、信仰が無くなり、失望をするに至るが如きことが即ち其れである。

危険が攻撃して來るのは唯精神内からばかりではない。惡しき念慮は種々

あるが、皆是れ惡魔の業とも見る可きである。『暗黒は常に妄想の住む所となる』といひ、『暗黒は皆神經の病である』といふ人もあらうが、決して左様ではない。凡そ吾人々間を包圍せる眼に見えぬ暗黒の偉力は吾人の神に對する信仰を破壊せんと待ちかまへて居るのみならず、其の偉力中の偉力は、神の永久の御子の信仰をすら破壊せんとした程であつたといふ事は、是れ新約全書中の神祕にして而かも疑ふ可からざる教義である。以弗所書に『われらは血肉と戦ふに非ず、政また權威また此の世の幽暗を宰る者、また天の庭にある惡の靈と戦ふなり』とある。而して惡の暗示は内部から起ることもあるが、同じく外部からも來るものである。『人の窮せる時機は神恩の好機會である』といふが、然しまた『人の窮迫の時は惡魔の乗する時機でもある』。惡魔は吾人が戦ひ疲れて居る時に巧みに誘惑を爲すものである。丁度キリストが曠野に獨り出て四十日間の斷食の後の疲勞を覺えて居た時に惡魔が、時こそ

到れと彼を誘惑したのも此の筆法であつた。悪魔が吾人を襲ふのは、アマレックがイスラエルを攻撃したやうな筆法であつて、強者は攻撃し得ず唯「後へに在るものを撻ち、弱きもの疲れたるもの衰へしものは、悉く之を攻め」るものである。故に悪魔の悪軍勢は、丁度森林の獸の馴らすべからざるものに似て、即ち晝は形をあらはすの勇氣なく、唯夜に入つて這ひ出で、所々を徘徊しては戸じまりの無い所を探して窓や戸の隙より躍り込まんとし、時には實際其の内へ入込んで人の命を取る事がある。

ジョン・パンヤンは、悪魔が天路の旅客に斯くの如く攻撃して來ることを知り、特に其の『屈辱の谷』に在る時に然ることを承知して居た。そこで彼は『こゝは危険なる場所なり。此の谷にてクリスチヤンはアポリオンに出逢ひたるなり。彼アポリオンは、飛龍の如き翼を持ち、熊の如き足をして、獅子の如き口をしたる怪物なり』と言つて居る。而して天路の旅客にして、右

の旅客以前、または以後に、同一の經驗をして此の低き且つ寂しき悲しみの谷を通つたものが少なく無いことであらう。

此の如き巧黠なる襲撃を爲す悪魔を、常に喰ひ止めて置くには如何したらば可からうか、と云ふに、其れには唯一つしか方法は無い。慶福と眞理と平和との神の光を悪魔の上に發射してやる事が即ち其れである。悪魔は暗黒の生んだものである。従つて神の光に面することを厭ふものである。諸子も承知の通り、イスラエル人が長い間の彷徨をした話を讀んで見ても、沙漠に徘徊する野獸の爲めに彼等が害を被むつた話は少しも出て居ない。

抑も是れは如何した事であらう？、蓋し『夜なく火の柱』が天幕の上に輝いて、其れがイスラエル人の保護をした爲めに他ならないのであらう。野獸は其の周圍に居たのであるが、かく光に保護せられたる軍勢には、一人と雖も、觸るゝことが出来なかつたものである。イスラエル人は、神の光の中

に住んで居たものである。——晝は素より夜よ中でも、而して主は天幕の周圍には『火の壁』となり、其の『内部には榮光となり給ふ』た爲めに、彼等は平和の裏に保たるゝことが出来たのであつた。

現に今日でも、探險旅行をする人々は、日暮に火をたきつけて後、野獸が眼の球を光らかして光の彼方にとりまいて居るのを見受ける事があつたり、又は兎音たてず這ひよつて来るやつが有つても、火に畏れて側へは寄り得ないし、又縦ひ寄つて來ても、天幕の内にランプがありさへすれば、其れを追ひのけることが出来るといふ實驗をして居る。さらば惱める心痛める心を持つて居る人々よ、汝の避難所は此處である。此處に居れば、『夜のおそれ』は避ける事が出来る。汝は宜しく神の光の中に住む可きものである。神の愛の光は常に汝の上に燃えて居る。——これは疑ふの餘地なき事である。故に唯汝の信仰の光も、心内に煌々たらしめよ。然らば汝何物も恐るゝには及ぶまい。

父神のかはらぬ恩徳を信じ、己を惱ます所の己自らの暗黒思想は、全く悪魔の所爲で、わが心に起るものだと思つて、之を處分したがよい。然らば『神に安住せる』心の完たき平和が其の爲めに書はるゝ事は無いであらう。

エゼキエルにやさしい愛の言葉がある。これは『雲深き暗き日に諸の處に散りたる』羊に心をくばり給ふ神の愛を、神自ら語り給うたものである。其の御言葉に曰く、『われ彼等と平和の契約を結び、國の中より悪しき獸を滅ぼし絶つ可し、彼等すなはち安らかに野に住み森に眠らん』と。若し此の言葉を文字通りに讀んだら、今日惱める吾人の爲め、何の意味も無い事であるが、之を精神的に讀むと、其のうち神恩の慰藉が十分に含まれて居る。人生は時に荒涼慘憺たる曠野の避難も慰安もなき殺風景なところの様に見えることがある。又時としては人生は寧ろ迷つて出られぬやうな深林の、困難、艱難多く、且つ幽暗甚しくして寸前も辨せず、四面に不測の危険ひそみて

異様の疑懼と恐怖とを人に懐かしむるにも似たる場合がある。

此の二つの場合に對し、主は完全なる豫防の道を講じて下さったものである。即ち神の平和の主として、自ら一切の信仰篤き者に對し、『平和の聖約』を爲し給うたのである。神は吾人の家を空野と定め給ふ事はし給はぬ。何となれば吾人は之を通り越えて其の方向にある天國に至る所の旅客だからである。故に神は吾人を以て空野の中で愉快な生活をす可きものとは考へ給はずして、吾人は安全にそこで生活をす可きものと宣らせ給うたのである。然し其れだけでも有り難い事である。此の世より、彼の世へ行く路の一步々々に、光明の處でも暗黒の處でも、吾人は絶對的に安全に通つて行くことが出来て、『森の中にも眠る』ことが出来、安らかな心で寝ることが出来ると思へば、誠に有り難い事である。縦ひ疲れ果て、最早一足も前まず、眞暗やみで光は一つも見えないでも、此の安全があれば即ち其れだけで澤山なわけではないか。

ソロモン王は安眠を得んと大に苦心した。雅歌に『視よ、こはソロモンの乗輿として、勇士六十人、其の周圍に在り。イスラエルの勇士あり、みな刀劍を執り戰鬪を善くす、各人腰に刀劍を帯びて夜の警戒に備ふ』とある。ところが此れでも矢張り彼は其の父王ダビデよりも安眠が出来るといふわけには行かなかつた。ダビデ王は青天井の下に寝て、残忍なる敵にかり立てられたけれども、其の神彼を守り給うた故に、『われ身を横ふるに平和と安眠と兩つながら之あり、蓋し主よ、主は吾をして安全に世に在らしめ給へばなり』と彼は歌つて居られたわけである。抑もこれは如何なる意味の言葉であらう？ 吾を愛する愛の手に小兒の如くに抱かれて寝て、何一つ恐ろしい事知らずに居られるとは一體どんな事であらう？

慈母の腕に眠れる子にとつては、何處に居やうと安心である。縦ひ野に居やうと森に居やうと、行くところとして安全な家であらう。縦ひ暴風雨の夜

の真くらやみの中なかでも、和風晴天わふうせいてんの日中にちちゆうと何なんの變かはりもなく安全あんぜんに眠ねむられるであらう。其その境遇きやうぐうどは何なにう變かはつても何なんともない。唯ただ小兒せうじは母ははの抱擁ほうゆうの手てを感じたいのみである。手てが自分じぶんにかゝつて居をると思おもへば、其それでモウ満足まんぞくなのである。故ゆゑに主しゆは『永遠えいゑんの神かみは汝なんぢの避難所ひなんじよたり、汝なんぢの下したより汝なんぢを支さふる永遠えいゑんの腕かみあり』と言いひ給たまうたのである。是こゝれ豈あに主しゆの吾人ごじんに許ゆるし給たまふ平安やすらひの表徴しるしではなからうか。

I grasp Thy strength, make it my own,

My heart with peace is blest;

I lose my hold, and then comes down

Darkness and cold unrest.

Let me no more my comfort draw

From my frail hold of Thee;

In this alone rejoice with awe,

Thy mighty grasp of me.

J. C. Sharp.

十二 變れる姿

『我が信仰の心なんぢを仰ぎまつる』と聖歌に巧みなことが言ッてある。心の態度のうちで斯んな安全な態度は無い。人間の誘惑は主もに回顧するより生じ、又其の危険は主として俯瞰するより起るものであるが、吾人の憂悶は、餘り前途を見すごすから起るものである。吾人は不斷に仰視の妙術を稽古するの必要がある。これは萬病の妙藥である。安全と安心とを得る唯一の方劑である。

詩篇第三十四を見るに、此の妙術をよく心得た偉大なる難行者ダビデの感謝の記憶が書いてある。曰く『われエホバを尋ねたればエホバわれにこたへ、我をもろくの畏懼よりたすけいだし給へり、かれらエホバを仰ぎのぞみて光をかうぶれり、かれらの面は恥ぢあからむ事なし』と。其の仰ぎ望んだと

言ふのは誰が仰いだといふのであるか。是れ即ち彼の『恐怖心』ではなかつたらうか。彼の恐怖心は幻の大軍勢の如くに彼が周圍を取巻きて皆面を低れ、彼の憂鬱をして一層甚しからしめんとしつゝあつたのである。然るに彼ダビデは、之に命じて己の救ひの神を仰ぎ望ましめた。ところが忽ちにして天よりの光が下ッて其の光の力にて此の恐怖の大軍の面は皆輝き渡つたのである。

惱める心をもてる人は大抵誰も知ッて居る通り、恐怖と豫兆とが心を襲ひ來るときは、憂鬱次第に烈しくなり、心は終に結ばれ勝ちになるものである。然らば吾人は右の如き妄想の恐れといふ大軍に對し、如何なる態度を取つたらば宜しからうかといふに、これには唯一つしか有効の手段はない。——即ち之に命じて上を仰がしめる一事である。一たび天よりして、變容の力ある光が降ッて來るならば、其の大軍も面貌を變じて、復た見識らぬ姿と變はる

ものである。

外にも手段は有つても、此のやうに甘く憂悶を一掃する力あるものは無い。憂悶と戦をして見ても、其れは何の益にも立たぬ。ストア教的に克己を以て之に對し、免れ難き運命として之をも諦らめてしまふ様な事をして見ても、其れで安心は出来ないものである。それかと言つて、憂悶の經驗をした事の無い友人等が、好意を以て吾に同情をして呉れても、吾が胸の痛は癒えるものでない。通り一ぺんな其の慰安の言葉は、吾人は聞き厭きた。曰く「貴下の苦みも、世間多數の人の苦みを思ひ合はすれば、未だく何でもない。」曰く「背に負ふ苦の重荷も、慣るれば軽きものである。」曰く「長き路にも曲がり角はあり、闇夜にも夜あけはある」と。——かやうの言葉は少しも慰安の効力の無いものである。此んな慰安の言葉では、逆も間にあはないのである。間にあふものは唯一つしか無い。(而して神こそ其の教師である) 即ち仰いで

以て信せよといふ一事である。憂悶に對する心の態度をかへて、恐怖の方から信仰の方に向きを直すやうにせよ。然らば其の憂悶は、直ぐには消滅もしまいが、其の時から次第に吾人を苦しめる事が無くなるであらう。

内憂外患交至る場合は、丁度船長が反心ある乗組員をつれて暴風雨をくつたやうなものであつて、外よりも内の方が危険である。然るに斯くの如き謀反的な心が吾人の心内にも存在する事が少なくないのである。左様の心を持つのは第一愚な事である。否、愚は愚、それこそ一大罪惡である。何となれば是れ即ち父神の御約束を忘れた事に當り、父神の指導を疑ひ、父神の愛の實存を疑ふことに當るからである。

信仰なくして徒らに恐怖を懐くことが、後になつて見て誤まつて居たと感ずる事が如何ばかりあるか知れぬ。歴代志略上に「其の母我れくるしみて之を産みたればとてヤベツ(くるしみ)と名づけたり」とある。其のヤベツなるも

のは、却つて其の兄弟の中にて最も尊ばれたる者と成つた。そこで其の母は神の御手より下されたもの、内にも、最もよき賜物は此の子であると思つたのである。今人生の憂は吾人の周囲にも在る。而して吾人これを名づけて『恐怖』といつて居る。試みに暫く仰ぎ望んで而して待たば、應ては之をも『天福』と呼ぶやうになるのであらう。悲しみの心は特に悲觀的な見地を發見するのが巧みであつて、此の所からして苦患を見わたさうとするものである。さうして置いては、終には神の攝理をも悪しざまに言ふやうになる。ところが初めにヤベツ（くるしみ）と見た事が、後に至つて、先に光明あるやうに見えしものよりも、却つて光明ある有りがたいものなる事が分つて來る場合は幾らも有るものである。

然し苦患の烈しい時は、餘程赤子のやうな心を持つた信仰篤い人でなければ、此の事は信じて居られないものである。子供のやうな心を持つて、神の

御側に近づいて生活をして居る人のみが常に之を眞理と認めるものである。精神内に於ける神の靈が、神の攝理の下つて來る時に、之と交通をするには、一種の電信的符號が備つて居て、其の時之を知己と認め、之を歡迎するやうに出來て居る。然るに不信の人の心は、之を見て反つて畏怖し、之に對して、防守の態度を取り、之を敵視するの結果、終に之を本當の敵として了ふことになる。神は上を仰ぎ望んで居る眼を持つた人には穩な心を與へ給ふものである。

人生の憂患は、凡て吾人が上を仰ぎ見るとき忽ちに其の苦しめ力を失ふものである。即ち吾人が神の指導の御手に認め、一見如何にまどはしき場合と雖も、神は全く己に任せよと吾人に教へて居られるものと感ずるときは、其の憂患も復た吾人を苦しめる力が無くなつて來るものである。友人二人して腕をくんで歩行して居る時、若し其の一人が此方へ行かうと言ふに、一人

は否、彼方にと言ふが如き事あらば、彼等は反對の方角に引かれて行くか、又は別になつて歩行して行くかせねばなるまい。然るに神は己の子等をして神と相別れしめる事を肯るさせ給はず、従つて若し彼等が神の指導と反對しやうとすることがあれば、神は之を引きずつて行き給ふものである。其の時、かく引きずられて行くことを甘んじて居さへすれば、苦難煩悶は無くなるものである。

或る大苦難に遇つた婦人が、嘗て神の苦しめの御打撃は、唯吾人に一層近づき來り、又吾人を神に近づけんとする愛ある御考に外ならぬものであると云ふ意味の妙思想を言ひ表はして居る。其れは此の婦人が、忽ちの間に父母も夫も子供も亡くした時の言葉であつた。即ち其の時此の婦人はおとなしく諦らめて、而かも苦しいといふ顔もせず、成るほど神は吾が愛するものを悉く御召し上げなされたいものと見えます。それでは謹んで其れを差上げませ

う』と言つたのである。かゝる御要求を神がなされる事は、吾人に對しても有る事であつて、神は其の縦横無礙の慈悲を以て、此の要求を吾人に爲し能はざる場合には、往々其の懲らしめと其の苦しめの御手を以て、之を爲し給ふものである。初めには吾人は之を恐れるが、一たび上を仰ぎ望むに於ては、吾人の恐怖は安心と一變するものである。

此の言葉は聖詩にもあるが、これは仰いで上を望むには、神に一切を任せ奉る考で上を仰がねばならぬばかりでなく、また祈りの精神を以ての仰視でなくてはならぬ事を教へたものである。而して吾人が深い悲しみを知つた時こそ、其の祈りの價值が本當に分るのであつて、祈禱は吾人をして安心のみの存在する平穩の境涯に到らしめるものであると、其の時始めて知らるゝわけである。苦難に遇へる人にして、自己の經驗から此の事を本當に左様だと悟るに至つたものは世に少なくはないのである。彼等も初めは困難に迫ら

れて、いろく之を遁れる方法を講じて見るが、逆も駄目だと知って、終に其の心の重荷をおろして、一切これを天なる父神の慈愛の御心に委ねるに至るものである。而して初の程は苦の重荷が取り去られるやうにとのみ、恐らく祈って居たものが、暫くすると、唯父神の愛に満てる御目的さへ達せらるれば、と祈るやうに成るのである。斯う成ると、今まで知らなかつた新しい平和が精神にみち／＼て来るものである。此の時、翻って最初の苦しみを遁れたいと祈って居た折のことを考へて見ると、あゝそんな事を祈って居たかなアと自分でも驚くものである。かほどまでにも彼は其の神と完全に融合一致するの高級的信仰に進んで居るのである。従って今は昔祈った苦を避けるの一事は如何でもよいといふやうに考へるに至るものである。——其れも其の筈で、彼は其れよりも遙かに優れたものが手に入つたからである。惱める者には祈禱にまさる手段は無い。而かも此の手段は何時でも手に入

るものである。吾人は湖上で眞の闇夜に暴風雨をくつた基督の使徒等のやうな目に遇ふかも知れぬ。然し其の眞くら闇の中で大きな聲をすると、今でも主は直ちに聲聞きつけて助けに来て下さるものである。眞闇であれば、目は見えず事もあらう、舵もとれぬ事もあらう、櫓もこげぬ事もあらう。然し何程くらかつたとて祈禱の出来ぬ事はない筈である。また暗やみで祈禱をするのは、暗やみで字を書くやうなもので、少しは勝手がわるいかも知れぬが、神様は暗闇も明かるみも同じであつて、こちらの意味は容易に讀んで下さるものである。かくて吾人は歌ふに暗過ぎる事は無いものと云ふことを悟つて、大恐悦をやる事に成るのである。吾人が浪風を鎮め給ひし御方を崇拜するのは、使徒等の如く舟に在る時ばかりではない。彼岸に着いたら、一層大なる喜悦を以て崇拜するのである。彼岸には浪は全く静かである。何となれば『最早其處には海はなし』だからである。

Come to my help, O Master!—once in sorrow
 My more than brother—King of Glory now;
 Even in my tears a gleam of hope I borrow
 From the deep scars around Thy radiant brow.

Come to my help, as once God's angels hastened
 To cheer Thee in Thy midnight agony;
 O Lord of angels I once by suff'ring chastened,
 Forget me not in mine infirmity.

Walk Thou the wave with me, the tempest stilling;
 Let me but feel the clasping of Thy strength—
 Thy heavenly strength—through all my pulses thrilling,
 I shall not fear to reach the shore at length.

Dr. Bethune.

十三 砕かれたる希望

失望ほど堪へ難いものは無い。渴を醫せんとする時、泉の無いのは猶ほ忍ぶ可きも、折角それが有った場合に味はッて見て苦いほど失望することは無い。又は目も眩むばかりの湖と見しは幻視で、燃えるやうな空が燃えるやうな砂漠に映った蜃氣樓であつたと知つた時、又は水と見たものが本當の水であつても、味はッて見れば其の味が毒のやうに苦かつたやうな場合——、凡て斯くの如き場合には、其の失望や譬ふるに物なき程である。世間のことは大抵何事でもじつところへて、面もふらず長く辛抱して居ると、終には辛抱し遂ほせるものだが、失望だけは別である。これは全く話が違ふ。失望に出逢つたら、其の瞬間に吾人の活氣までも破砕するものである。

此の事を暗喩的に書いたものが出埃及記にある。即ち『彼等遂にメラに到

りしが、メラの水苦くして飲むことを得ざりき』とある。イスラエル人等は當時、不思議にも神に救ひ出され、紅海の岸邊に凱歌あげて、希望満々行く先きくと段々安心が殖えるとはかり思うて其の旅路に就いたものであつた。然るに、三日と経たぬ間に、炎々たる砂漠に渴を覺えて小川の一筋も流れて居ないといふ目に遇つた。終に遙かに椰子の樹が空に連なるを見て、水の有る事を知つたものゝ、其處に行つて見れば、其の水は苦くて飲めないと知つた時、彼等の失望は如何であつたらう。

此の時、全ての天幕内に物騒な不平の聲が起つた。これは左もある可き事である。吾々とても其んな場合には同様に不平を言ふであらう。されば神もイスラエル人等の失望を禁じ得ざるを然こそと思ひ給ひ、少しも其の不平を咎責し給はず、さながら親が病兒の痲を起すとき叱ることもしない様に、やさしく之に對し給ひ、モーゼをして木をとり之を湖中に投じて、其の水の苦

みを取り去らしめ給うたのみならず、翌日は神彼等を更によき休息地に伴れ行き給うたのである。それが即ちエリムの井戸であつて、清く甘い水が一杯あるところであつた。

失望した人々を咎めて信仰が缺けて居ると責めるのは、苟くも神の試煉に遇つた人には忍びない事である。吾人は彼等を咎責して以て自ら得意の感の起るのを喜び、而して同様の場合には、吾人も亦忽ちにして彼等同様になる事であらうとは少しも思ひつかないものである。吾人は斯かる失意の人を見れば、『左様に痲癩を起して八あたりをやるのは罪だぞ』と言ふ。成る程それは左様であらうが、然し、吾人果して吾人の日常の務を盡すに當り、痛める頭を抑へ、裂けんばかりの胸を撫でつゝ之をやり通さうと試みた経験があるか如何か。果して百千の焦心苦慮の間に處して、悠悠逼らざるの心を把持すること容易の業であると経験した事があるか。輾轉反側の幾夜をあかして

疲れ切つた身體をしながら、朝はチャンと笑顔をたへて寢所から出て来て、人に愛嬌をふりまく事が、いつも出来るものであつたか。自分の生命よりも大切にされた人が、急に残酷な病の爲めに今にも死にさうになつた時、而して自分の現世の幸福の望みが、悉く地に委せんとする時に當り、冷然として之を忍ぶことが出来たといふ経験が有るか。左様の時、唯謹んで「神の御旨をならせ給へ」と申して居ることが出来たか。左様の経験は無い事であらう。然らば吾人も他人に對し咎責を爲すこと無く、主其の人のやさしい同情を以て、吾人も他人を思ひやらねばならぬ事である。

人生には誰も失望が多い。其れが過去に無かつたら必ず未來にある。誰でも喜びをあてに居た矢さきに、前記の「メラ」の不平を絶叫せねばならぬ運命に立ち至り、甘い水が有ると思つた處に苦い水を見出すに至るものである。而かも人生の旅路に出立つて程なく誰も此の経験をするのである。富貴聞達

和樂團樂の空想——是れ果していつの世でも實現せられた事が有るか。斯かる夢が一たび手に入れて見た時、本當にエリムであつたやうな例が有るか。是等の迷は、一時精神の渴を醫するやうにも見えて居るが、實際手に入れて見ると、失望のメラ湖に過ぎないと云ふやうな事は無いであらうか。

然し失意の時が来てこそ、神は毒味を取り去る生命の樹を吾人に示し、絶望を喜悅にかへて、以て吾人の苦き経験を甘きものとし給ふものである。昔神がモーゼに示し給ひし樹は、其の時その場で奇蹟により造られし樹ではなかつたのである。此の樹は既に湖水の傍に生えて居たものであつた。神は其の都度々に新に吾人の惱める心に對する慰藉法を講じ、例へば新なる聖書、新なる贖罪所、新なる救世主、新なる代贖、新なる約束、新なる特赦などを造らへるには及ばないのである。是等種々の慰藉法は、實に吾人の側に在るもので、吾人の不時の要を待つて居るものである。唯神吾人の眼を開き

て是等を見せしめ、且つ吾人に之を見るの眼力を授け給ふに於ては、即ち吾人は是等のものにより、克く吾人の悲を感謝と讚美とに一變することが出来るであらう。さればハガーも「主其の眼を開き給ふ」までは、ヘルセバの砂漠に井戸の在る事が見えなかつたのである。即ち悲嘆の涙に見え分ずと雖も、猶ほ井戸はいつも其の側に在つたものである。助けはいつも案外手近に在るものである。されば眼も開かれず、又信じて絶る手も持たない人は氣の毒な人である。

然るに、神は常に苦き水を甘くするのみならず、亦神の旅客たる吾人々類を指導して、其の苦き井戸を過ぎ、常に甘き井戸に至らしめ給ふものである。メラ既に後に在れば、エリムは即ち前に在るわけである。エリムがメラに近しいといふのは、餘程諷したところがある。即ち唯僅か六哩のことで、エリムとメラとの差を生ずるものである。人生の樂と苦とも、亦畢竟相距る極め

て僅かなるものではないか。且つ旅客は唯りメラの苦さのみを経験するのではない、たゞ患難に苦しめる人々は、吾人をして爾信せしめんと欲するけれども、實は左様ではない。人生にはエリムが澤山ある。而して悲惨より喜悅に至るのは、僅かに一日旅程ぐらゐのものである。ヤコブの如きは此の事を經驗した人である。彼は元世にも稀れなる悲の人であつて、唯恐怖のみが其の伴侶であつた。然し「ヤコブその途に進みしが、神の使者これに遇ふ」と創世紀にも出て居る。ダビデも亦此の經驗をして居る。

「嗚呼わが魂よ、汝なんぞ、うなだるゝや、汝なんぞわが裏に思ひみだるゝや、……たい我が涙のみ晝夜を過ぎて、我が糧なりき」と彼が言つて居るのは、即ちメラである。即ち此の時のダビデは、失意のダビデである。然し「なんぢ神をまちのぞめ、われに聖顔のたすけありて、われ猶ほわが神をほめたふべければなり」と言うて居るから、彼は臆でエリムに到り得たわけで

ある。ヘゼキヤも同じ經驗をした。『わが眼はうへを視て衰ふ。エホバよ、われは迫りくるしめらる。願はくは我が中保となりたまへ』と言つた時の彼の眼から見れば、人生は全くメラであつたのだが、少時経つと、彼は『視よ、われに甚しき艱苦を興へたまへるは、我に平安を得しめんが爲なり。汝わがたましひを愛して滅亡の穴を免れしめ給へり。そはわが罪をことごとく背後に捨てたまへり。……主よこれらのこと（悲しみ）によりて人は活くるなり。我が靈魂のいのちも全くこれらの事によるなり』と言ひ得るに至つたのである。其の時は已にエリムに達したものである。パウロも亦此のメラを経験して居る。即ち彼は己が肉體に興へられし『刺』を己より離さんことを三次に求めたれども、痛を去ることを得なかつたのである。然し彼はやがてエリムに到達して、『是に由りて我れキリストの爲めに懦弱と凌辱と空乏と迫害と患難とに遭ふを樂しみとせり。蓋吾れ弱き時に強ければなり』と言つ

て居る。若し夫れイザヤ書に『食しきものと乏しきものと、水をとどめて水無く、その舌かわきて衰ふる時』——これは死の如く苦きメラにある時のこと——『われエホバ河をかふるの山に開き、泉を谷のなかに出し、また荒野を池となし、乾ける地を水のみなもとと變ん』とあるに至つては、是れ豈天路の旅客一切に讀ませんとて書かれし言葉ではなからうか。彼等は即ち是に依りて各自エリムに達することが出来るわけである。

We thank Thee, Lord, for weary days

When desert springs were dry;

For then we proved what depth of need

Thy Love could satisfy.

We knew Thee as we could not know

Through heaven's golden years;

We there shall see Thy glorious face,

But Mary saw Thy tears.

The touch that heals the broken heart
Is never felt above;
The angels know Thy blessedness,
But way-worn saints Thy love.

P. B.

十四夜 の 歌

爰にまた詩篇中の名句がある。曰く「われつねにエホバを祝ひまつらん、その頌詞はわが口に絶えじ」と。之を言つた人は誰ぞ。定めし世の憂き苦勞から見事免れ得た人であらう。否々左様ではない。此の歌を謠つた人は、轉變極まり無き生活をした人で、殆んど世の如何なる人々よりも苦難に會することの多かつた人である。彼には大なる天福があつた、大なる赦免が與へられた、大なる名譽があつた、大なる喜があつた。然し彼は亦大なる悲哀、大なる災難、大なる不運、大なる罪の罰を與へられた。然も彼は、斯くまでの不幸を見ながら、「われ常に神を頌せん」と言ふことを得た。即ち吾が失意の極にも猶ほ得意の極の如く、流浪の生活にも和氣霽々たる一家の團樂の裡に在る時の如く、又吾が極痛の責罰を受くる時にも、猶ほ悅樂極まり無き時の

如く、常に神を頌することが出来たのである。而して其の之を頌するや、單に『吾は如何なる場合にも神を忘れじ』とか、『吾は如何なる時にも神に任せ奉らん』とか、其の様な事に過ぎないものではなかつた。尙ほ一步進んで、『吾は如何なる事ありとも神を頌せん』と言つたのであつた。唯失意を起すに過ぎないらしい事でも、彼に出逢へば、即ち歌の種と成るのであつた。

試みに此の名歌を讀め、否、之を歌つて見よ。——これは口で讀むものでなく、心で歌ふべきものだから、——即ち一誦すれば、爰に羽化登仙の感がある。然も吾人が此の歌を吾が歌とするを憚るのは、吾人自ら斯かる隨喜渴仰を受くるに値せざることを氣遣ふからである。然し此の神はダビデの神であつた如く、また吾人の神である。故にダビデが上を仰いだやうに、吾人も首をあげて天を仰ぎ、ダビデのやうに信仰を懷き、ダビデのやうに信頼するに於ては、吾人何程罪ありとも、ダビデが罪ありながら天慶を仰ぎ求めし位

のものは、吾人も亦求め得られぬ事はない。

吾はわが一生の苦患を、却つて神に感謝し、神を頌することを得るか。これは確かに問題である。而かも深遠なる意義のある問題である。これは、試煉に遇つても、神に信頼し得るかといふ問題ではなく、將た又此の苦患を吾に下し給ふ故に神を正しとするを得るかといふ事でもない。或は又苦患を超越して、眼に天の寧福を見得るやと云ふ問題でもない。問題はそれ以上である。即ち唯今こゝで余は苦患を神に感謝し得るかと云ふにあるのである。之を爲すには大なる神の恩が入用である。而して之を爲し得るものは、唯り精靈の教を受くる人のみである。

何故に吾人は常に之を爲し得ざるか。信仰に由りて生きて居ながら、何故それが出来ぬか。多分其の主たる理由は、吾人には昔の信者のやうな赤子の如き信仰心が缺けて居る爲であらう。吾人は昔の人に比べると、智識は勝れ

て居る。有爲の材たる上から言ッても勝れて居る。神の愛の御心を得する事も彼等よりは明白である。其のくせ、昔の人の方が吾人よりは神に近く生活をして居たらしく思はれる。恐らくこれは、小兒の時の方が、年をとッてからよりも、萬事打明けた心になり易いからであらう。若しさうでなければ、或は神が昔の信者の智識の眼がくらのを補なッてやらうといふ考で、其れを吾人よりも近く引き寄せてヤッて、明かに眼の見えるやうにして下さッたものかも知れぬ。然しアブラハムやモーゼやタビデ、イサヤの如きは、非常に神と親しい間柄であッたやうに思はれる。ソドムの爲めにアブラハムの祈ッた言葉を懐ひ起して見るがよい。これほど神に對し大膽不敵な人間は有ッたものでない。又モーゼが神と言葉をかはした事を考へて見よ。これほど狎々しい間柄がまたと有らうか。又ゼホシヤフハの信仰を思つて見よ。これほど崇高な信仰が那邊にあらう。又ダビデの喜び勇みて信頼した事を思へ。

これほど高く、また深い喜悅の情が何處で有らう。ダビデの詩篇には勝利の絶叫がある。此のやうな強い力のある喜悅の情は、何程熱誠をこめた今日の讚美歌にも表はれては居ないのである。

ハズリツツは、諧謔半分に斯のやうな事を言ッて居る。「ヤコブの時代には唯天と地との間に一つの梯子があッたに過ぎなかつたが、吾人の今日では、天が遠くへ上ッてしまッて、星宿の境に至ッて居る」と。これは世界の小兒時代が過ぎ去ッて以來、人の信仰心に小兒らしい所が大分無くなッたと云ふ感と言ひ表はしたものである。今日の人間は、昔の人の知らなかつた澤山な事柄によッて心が引かれ、生半可な學問や淺薄な哲學は、神と人間との交に水をさして居る。固より今人は昔日の「子供くさい事」は棄てなければならぬが、過去の「子供らしい」ところは益々必要を感じる次第である。基督が神は是等のことを唯「赤子」にのみ顯はし給ふと言ッて居られるのは、天

なる父神と交通して居た昔のもの、愉快さは、唯り吾人々類のみ復び之を得ることが出来る」と諭し給うた名言である。此の小兒のごとき心あればこそ、人は『萬事に神に感謝する』のである。

神が吾人に對し苦患を天福と爲しつゝある事を感じて、而して神に苦患を感謝するは、いとく易いことである。而して又實際、神は始終吾人の苦患を吾人の幸福と爲し給ふものである。苦患一たび到つて、心中に潜める幾多の悪徳を暴露し、洗滌し、吾人の慢心を打破し、恃むところを打破し、世俗的の勢力を打破し、吾人をして愛情の焦點を世俗的の富に置かず、心靈上の富を希望せしめ、——即ち一層吾人をして絶對的なる信仰に至らしめ、神が『今われ汝が極點まで吾を信じ得るや否を見んとす。汝果して其れだけの信仰ありや』と問ひ給ふやうに感ずるに至る時、——即ち苦患が性格全體を一變して之を美化し、其のよく柔順に忍び、親切に同情し、益々完全なる愛情

を懷くことに其の人の人生を愉快にし甘美にする力があるほどに成つた時、——而して之が爲めに神の愛われをして苦難に堪へ得しむと云ふことを、全く今まで知らなかつた意義が解釋し得るやうに成つた時、——此の時こそ實に最高の天福、即ち、其の天福の降る前に受けた諸々の苦痛を償つて餘りあるやうな、さういふ天福が感ぜられるものである。されば深痛にして而かも長年月間に亙つた苦難を蒙むつた人は、よく下のやうな事が言へるのである。曰く『われ日々苦と相親しくなりつゝあり。固より苦其のものゝ爲めに苦を愛するに至るには非ず、何となれば苦痛には一も愛着すべきもの無ければなり。兎にも角にも吾未だ神の親切を今の如くに知りしこと無し。神は如何に吾に近づき給ひ、如何にやさしき慰安の言葉をかけ給ふかを吾今始めて知り得たり』と。

神の用ひ給ふ此の苦難といふ手段には種々の効能があるが、就中此の苦難

の爲めに吾人が、ぼんやりとした考や、單に口さきばかりの話を止めて、本當の大實在境に至る事の出来るのは、其の効能の特に良好なるものである。人間の一生には、特に日常より眼が明かに見えて、神は一切萬有よりも吾に最も近く且つ吾に最も親しいやうに感ずる時があるものである。而して此の様な夢中になる瞬間は、多くは深痛なる悲哀の時にあるものである。故に所謂眞珠の門に最も近く住み、神が彼等の爲めに備へ置き給ふものは何々なりやを見て、大恐悦を得て居る善男善女を求めんとならば、之を惱める者の社會に求め、窮乏、悲哀の人の家に求む可きものであつて、王侯の宮殿に求む可きものではない。

吾人は病氣は健康と同様に、亦神の賜物であると感じることが常に有りはしないか。口には平常健康のみが神恩であるかのやうに言つて、病氣は神恩の取り去られたるものであるかの如くに言つて居るが、然し病氣は其の實健

康と同じく、亦一つの神恩であつて、而かも神の愛のしるしの賜物である。神は或る寵兒に對しては、健康てふ貴き賜物を下し、之をして盛に活動して愈々神の爲めに盡さしめ給ふこともあるが、また或る寵兒に對しては、長き苦の賜物を下して、之をして人を純潔清淨に化する神力の證明をなす者たらしめ給ふこともある。従つて是等の二様の賜物を下し給ふ神の光榮を頌するには、健康なる者が信心勤行に依りて之を頌する如く、病患にある者は信心忍辱に依りて亦同じく之を爲すことが出来るわけである。病床は傳道上幾多の説教壇に代はる可き有力なるものである。

故に深痛なる苦難に際して、『わが試煉に遇ふことのつらさよ』と言はんより、『猶ほ吾が爲めに賜物を殘し置かれしことの夥しさよ』と言はん方、遙かに優れる次第である。人は常に痛悲の度數を勘定してばかり居るではないか。それならば何も其の神恩の方を數へてはならぬといふ道理も有るまい。

例へば神が人の家庭に來つて愛する小兒を奪ひ去り給ふ時には、小兒の亡くなつた事をこぼすより、寧ろ神が猶ほ他のものをも取り去り給はざりし事を神に謝するも可からう。神若し吾人の現世の榮達を取り去り、其の代はりに和氣霽々たる爐邊團樂の樂は吾人に殘し置き給うたならば、此の爐邊の寶を取られざりし事を神に謝して、復た金錢の損失を訴へざるが至當ではなからうか。嗚呼わが魂よ、『なべての神の御めぐみを忘るゝな』。汝また『すべて時に神を頌する』やうに成らう。即ち汝の『うれひの心』にかへて『讚美の衣』をあたへ給ふであらう。(イザヤ書第六十一章第三節)。

Ah! vain conceit that glory with its light

Could do the work of Sorrow with its shade;

That Faith's high triumphs could be won by sight,

Or man, without the cross, be God-like made.

J. B. Moussell.

十五 長き最後の一哩

今の讚美歌に昇天の基督を誦した光榮讚美の一節がある。其れを讀むところ悲哀な調が見える。それが丁度世間多數の苦惱るものゝ感情を表白して居る。即ち初めに、

天なる家へと志ざし

昇りくゝて行きませり、

御座のまはりは音も絶えず

讚美の歌ぞ聞こゆなる。

とあつて、やがて

罪と愛に抑へられ
 上りも得せぬ現世の人を
 御つかひの手にすがらせて
 安けき御側に導きてたへ。

と歌ふのである。

是れ正に惱める幾多の神の子等の感情と祈禱とを歌うたものである。實際世界は盛んに活動し、教會も活動して、人みな活潑な生活を營んで居る。それに引きかへ、自分等のみは世の爲めにも神の爲めにも何一つ盡くす事もなく、唯々「地上にさまよひて上りも得せず」而かも樂觀してさまよつて居ることとならず、「愛と罪とに苦しみ」て、唯一刻も早く安樂に往生せんことを待つて居る有様である。

此の如きは情として左もある可き事ではあるが、亦病的の感情にも見られ

やう。抑も天といふものに對する人の心の態度には悪い態度が二つある。即ち一つには、現世の樂しみを棄てること、極端におそれて天とか極樂とかに行き心霊の準備が出来て居ないと云ふ態度、又一つには極端に人生の悲しみを遁れたさの一念から、一見無用なるが如き長い間の苦痛の鍛練を忍耐することを不快と思ふやうな態度である。

吾人の知つた人々のうちにも、口では滔々と上天の慶福のことを並べ立てながら、今俄かに其れを興へられるとなると、斯く早過ぎては困ると言ふものが居る。彼等は往生することを以て、「よき御國」に往くこと、信じて居ながら、早くそこに往くことは、餘りぞつとしないのである。其の實、彼等は死ぬるのが厭やなのである。そして奇體なことには、此の未練は、年をとるにつれて段々烈しくなるものである。即ち命をしさの念は死際に近づくだけ強くなつてくるのである。事實、わが一生は非常に悲痛が多かつたからと云

ッて、人は必ず死ぬ氣に成るとも限らない。

其の證據はいくらもある。年とりたくないと言ふ氣がある爲め、自分の本當の年を知らせたくなかつたり、又は様子や衣服で若く見させるやうな馬鹿な眞似をしたり、或は矢張り其の様なわけで、身體の段々衰へて行くことを思ふも厭やだといふやうに成り、遺言状を作るのを病的に恐れたり、危篤な病を見て不快に感じたり、人の死ぬのを見て厭やになつたり、全く死といふことを口にするのを嫌つたりするものが居る。彼等とても、口では上天は現世よりも遙かに善き所であると言つて居るものゝ、心から左様は信じて居ないのである。若し信じて居るものなら、早く往生の出来るやうになる事を、左まで厭やがるわけも無いのである。

さればとて、此れと正反對の方も亦困つたものである。現世を以て、唯儘ならぬ悲しの浮世とのみ観じて、苦患の外には此の世には何も無いと見くび

ッてしまひ、未來に往けば現世の苦しい目や、辛い目を見ないで濟むからと云ッて、唯其の爲めばかりに上天に往きたがるといふ。——さういふ態度は、何れにしても基督教徒的態度とは言へぬ。早く死にたいといふ願ひも、精神的の者なら何程でも差支は無いが、單に此の世は厭やになつたといふので、死にたいと云ふのは、少しも精神的の處がない。此の世が厭やになつたといふやうな口調で、己の試煉せらるゝことを歎き、苦しみを訴ふるやうな事は、吾人の大模表たる基督には無かつた事である。基督が死にたいと思はれた事が有るにしても、其れは苦しい目を見ないやうに成りたい爲めではなく、全く己の救世事業が完成して、世人を救ひ、且つ之を救ふ爲めに己を此の世につかはし給ひし父神の光榮を表はすことを得て、喜びたいとの考からであつた。

天につける心をもつた人々の思想や感情は、常に天の方に向上しつゝある

ものだが、唯世の中の辛さが厭やになつたといふに至つては、種々の責任を忠實に果たす事が怠り勝ちになつたり、其の苦患をして斯く長く持續せしめ給ふ神の愛を疑ひ出したりするの弊害がある。『汝が忍耐の要あるは、神の御心を果たしたる上にて、神の御約束のものを受け得ん爲めなり』とある。而して其の必要な所の忍耐なるものは、即ち生存の忍耐なのである。リチャード・バクスターの言に『われ若し長命せば、即ち長く神意に従ひ奉るを得べきが故に、吾これを喜びとせん。また若し短命にても、無窮の生活上に行く事なれば、亦何の悲しみか有らん』と言つてある。これが本當に高尚な基督信者の態度である。苦患の長く續く時は、これ却つて神意に柔順に従つて、神を讚美するの機會が延びたものと諦めると言ふ、——此の方が情氣返つて苦患の取り去られん事を待つより、いくら良いか分らぬ。

神の御國に吾々が還ることが段々延びくになるのは、神の方から見ても、

人間の方から見ても、相當の理由が有る。神の寵兒の中にすら非常に廻り合せが悪く、又持つて生れた不信心な性質と戦はねばならぬ爲め、先づ一切の苦患と罪惡とより直接に救はれんことが、何よりの神の御恵みであるやうに思はれる事があるし、且つまた往々苦痛に堪へかねて——これはよく聞く言葉であるが——『主よ、嗚呼速かに來りたまへ』と絶叫することが有る。然し其の人の靈の中に基督のすがたを寫すと云ふ神の御筆法が、今一と筆眼晴を點するの必要が有つたら怎麼する？ 若し神にして瀕死の人の唇を藉りて神恩のあかしを爲させ給ふ御意があつたら如何する？ 其の手が力を失ひ、其の唇が固く結んで了はぬうち、瀕死の人が猶ほ今一人だけ感化して、其の靈魂を救ふ必要があるか？ 神が認め給うたなら如何する？ 又若し神が死者に取り残されて悲しむ者どもの事に想到し給ひ、また瀕死の人の苦しみを救ふ可き唯一の道として、死の神が臨み來つたと云ふ考が起つて居れば、あ

とに残る者どもに諦めがつき易からんと考へ給ふものとすれば如何？

求道者の宗教的經驗を聞くやうな聖職にたづさはった人々は、よく知ツて居ることであるが、其の發心の動機は、大抵臨終の病人が信心を以て勇んで死途につくを見たことに原因するものである。而してこれがまた病死者の死期の延びくとなる一理由とも見られるわけである。ベタニーの姉妹は、何故彼等の愛し奉つる主の彼等を救ひに來給ふこと遅きかを解せなかつたが、神は是れ『神の光榮の爲め、神の子の是に依りて光榮をうけん爲めなり』と言はれた。成る程、其の後の出來ごとから推して考ふれば、全く其れに違ひなかつた。即ち『ユダヤ人にしてマリヤのところに来り、エスの爲せる事柄を見、エスを信するに至りしもの少なからざりき』とある。現在神が祈禱に耳をかし給はず、又苦しめるもの、早く如何にか爲りたいと思ふ心を見えなはし給はないで、愚圖々々して居給ふやうであつても、決して時期は過まり

給ふこと無く、死を下す可き時には下し給ふものである。神は人情如何ほどの苦痛までは堪へ得るかといふことを精確に知り給ひ、信仰が無効になるやうにまでも、苦痛を烈しくし給ふやうな事は決して無いものである。神は又其の苦痛の長びく事から、如何な結果が出るかを善く御存知になつて居るのである。そして其の爲めに神は死を欲する人をも生き長らへしめ給ふものである。

故に死にたくても死なねぬことを『現世に彷徨する』などと言はないで、宜しくヨブの言つたやうに『變化の到るまで、定められし時の間を忍びて待つもの』と言ふべきである。若し『吾人をして充足圓滿のものたらしめんが爲めに完全なる忍耐を吾人になさしめ』給ふ必要が神にあられるときは、吾人は神が往生極樂を下し給ふに必要とし給ふ時間を待ち終ほせ、萬事神の爲さるまゝに任せ奉る可きものである。

Teach me to live ! 'tis easier far to die,
Gently and silently to pass away ;
On earth's long night to close the heavy eye,
And waken in the realm of glorious day.

Teach me that harder lesson, how to live
And serve Thee in the darkest paths of life,
Arm me to conflict, strength and patience give,
And make me more than conqueror in the strife.

Voice of Comfort.

十六 渡頭に臨みて

長途の旅にあき果てた巡歴者も、旅路終へては愉快の念が起る。中でも彼方に天堂の町を打眺めた時の愉快はまた格別である。「天路歷程」の作者バンヤンは、此の境涯に名づけて「ビエーラの國」と言ひ、猶ほ「此處には風は香ばしくして爽快を覚え、日は晝も夜も照り渡り、死の陰の谿の彼方、絶望の鬼の達し得ざる地に當り、疑惑の城も此處よりは見えす、こゝに來し時、彼等は其の往く手の國の住民數名に出あひたり。こゝは天國の境地にして、輝ける人々の往々遊歩するところなりけり」と言つて居る。

斯かる境涯に達することは、よく有る話である。神の國への旅人にして、旅路のはてに斯かる前途の光景を認むるものは少くない。例へばモーゼがピスガの峯の頂よりカナンの崇巖なる光景を打眺めしにも譬ふ可きであら

う。ピスガの峯は信心の上にも有る話であつて、山に入り、或は密室に祈り、或は聖晚餐に列する時などに、半信半疑の信徒が忽焉として天堂を看得することなどは、よく有ることであるが、然し死の河の此方に立つて、彼方を見渡す時ほど、よく前途の見える事は無い。故に光榮を最も多く見るものは瀕死の人である。人の死なんとする時は、往々其の顔に光が出て来て、かくれたる天日の光を放ち、其の唇に聲ありて、天国の歌の響を帯ぶる様に見える。天井裏のいぶせき臥床より瀕死の聖徒は前途の光榮を望見するものである。而して此の光榮は一切萬物を超越し、詩人も夢想だに爲し得ざる所のものである。

然し斯くの如きことは必ず有るに極つた話ではない。實にこれは罕れなことである。死に臨みて斯く歡喜を覺えるのは全く例外である。斯かる事は當てにはならぬ。従つて其れが無いからとて信者の信仰を疑ふことはならぬ。

大歡喜で死ぬやうな信者は極少數である。本當の信者は誰でも死を征服し得た人であつて、絶對的に安全である。然し悉くの信者が死に際して唇に勝利の歌を謠ふものとも限らない。固より殉教者たちは、身を焼く火焰に接吻し、歌を謠うて天国に往つた事があるし、又信者にして臨終の床に大歡喜を覺え得たものも無い事は無いが、火の車の迎を受けて天堂に上るエリヤは世間に極めて少數である。救ひを受けたる神の子の大部分は、雲の車に乗せられて見えなくなり、自らは唯深き内心の安樂と希望とを意識するに止まるものである。斯かる臨終の例にあつては、大歡喜は一つも無い。唯愉快なる期待の念があるのみである。肉體は弱り精神は疲れて居る臨終の際には、言葉などが口から出るやうな事は稀であつて、大抵病床の周圍は涕淚滂沱たる有様である。

加之ならず、世にはこれより憐れむ可きものがある。彼等は暗き陰に包ま

れて死んで行くものであつて、見捨てられはせぬかと始終びく／＼しながら天に上り行くものである。然し、一旦、神に救はれ神に愛せられしものは、迎への車が火であらうが雲であらうが、振捨てられるやうな心配は毛頭無い。死ぬる時に勝利の歌は謠はないでも、其の歌は彼岸に上つてから謠ひ、天堂の幕をあげて其の内を見し刹那に思はず其の歌を謠ふことゝなつて居ても、勝利は即ち疑ひなき勝利である。臨終の聖者は言つた。「余や歡喜を覺えず、然りながら余に至き安心あり」と。これで十分である。斯かる人にあつては、天堂に入つた上で、手に琴を握つた時、始めて歌が口に出るのであつて、現世では歌へなかつたものも、天に入つて完全な歌が出れば、即ち歌ふやうになるのである。

さて此の如き完全なる安心立命は何に依りて起るか。他なし、救世主の十字架と其の勝利との御蔭である。救世主は、信仰あるものには必ず「われ

生くるが故に汝等も亦生く可し」との主の保證の慰安を下し給ふものである。昔は王の給仕たるものは、王に盃を獻するに先だちて己先づ其の酒を毒味したものである。若しも其れに毒が有れば毒味をした人が死ぬるので其れが暴露する。依つて毒味をする人が無事であると云ふ事は、即ち王も安心して其の酒が飲めるといふ保證になる。それで基督は「神の御思召により死を嘗め」給うたものである。彼先づ其の盃を口につけて、己には毒なかりきとの證明をしたまひ、「見よ、彼永久に生くる」にあらすやとある如く、吾人に示し給うたのである。されば基督信者よ、諸君にも亦毒は無いわけである。基督は諸君に彼の完全なる生命を分けて飲ましめ給ふものである。諸君のどん底までの經驗を経て、基督が天に往き給うたのは、即ち諸君をして基督の最高の經驗に入らしめんとの御心である。

基督教徒は、全世界を貫つても失ふのが厭やだと云ふやうな有り難い眞理

を有ツて居る。而してエスの贖罪の爲めの死は、人類全體の罪を贖ふに足るといふ大真理の次ぎに今一つ大真理が有る。即ち彼の天國に生き給ふことは、以て世界人類の恐怖心を除くに足るものであるといふ一事である。蓋し「多くの神の子を光榮に至らしめん」との約束を爲さん爲め、身を殺し給ひし基督は、終に上げられて天の御くらゐに至り、是に依りて其の約束を遂げ給ふ次第だからである。此の二大事實に含まるゝ慰藉を、基督自ら一つの金玉の言で以て言ひ表はして居られる。即ち約翰傳十章に曰く、「我羊は我聲を聴く、吾は彼等を識る。かれら吾に従ひ、われ彼等に永生を賜ふ。彼等いつまでも亡びず、亦これを我が手より奪ふ者なし」と。宜なるかなパウロも亦「或は死、或は生、或は天使、或は執政、或は有能、或は今、或は後あらん者……は、我儕を我が主イエス・キリストに頼れる神の愛より絶らすること能はざるものなるを我は信せり」と羅馬書第九章に言ツて居る。偉大なる

一章として知られたる此の羅馬書第八章には「罪せらるゝ事なし」で始まつて「絶らすること無し」で終つて居る。之を讀むもの誰か「完き安心」なかるを得べき。年經し巖の上に在るも吾人に完き安心あり、炎々たる火爐の中に在るも吾人に完き安心があり。地上の希望が瓦解する時にも、亦吾人は完全なる安心を得ることが出来るし、ヨルダン河の漲る時にも亦天國に於ける安心と同様に完全なる安心が吾人に有る筈である。

リチャード・バクスターは、其の死期の到來を「第三の誕生日」の到來と言ツて居た。而して其の到來を喜び待つこと、恰も子供が誕生日の御祝ひを喜び待つが如くであつた。又徳人ローランド・ヒルが、よく獨りで謠ツて居た歌に、

わが死なば

エスの御許に飛び往かん、

吾をめでにしエスなれば。

吾が如き身をば何とて愛で給ひしか、――

故は知らねど唯斯くと

思ふぞ奇しき所縁なる。

されば吾身をふり捨てて、

エスのみ獨り御榮に

入り給ふことよもあらし。

とある。

これは尤もなことである。主の御言葉にも『わが在る所には、わが僕婢らも亦在らん』とあるではないか。

若し死といふ考が不愉快であると言ふなら、其れは寧ろ死と仲が悪い爲めに過ぎない。而して其の仲の悪いのは、即ち神と仲が悪いからの事である。

若し神の救済の愛と、其の愛に含まれたる意義とを思うたなら、死も亦わが味方と見えて來るであらう。或る子供が人の繪を描くところを見て居たが、『僕なんざ、死の神を描くなら草刈りの鎌を持った骸骨にして描きはせぬ、黄金の鍵を持った天の使にして描くよ』と言つた事がある。誠に死を苦々しい事に思ふのは、良心に忘れ難い罪の重荷を負うて居る爲めである。神の平和と神恩に依る希望とあれば、死は生よりも一層甘いものとなる。裁判官の子供は、自分の父を見ても恐れないが、罪人は戦き恐れる。子供だつたら早速親爺のところへ飛んで行つて頬すりして貰はうとしたり、堯爾顔で親爺をまともに見て憚らないものである。『父を知る』人には死も恐ろしい事は無い。左様の人の心は、固く神の愛子エスの十字架にすがつて居る。死の神は即ち天國の世嗣を集める爲めに遣はされた天の使である。但若し吾人の死を恐るゝ念慮が、愛する人々の悲しみを思ふ念慮から起つたものに過ぎないで、吾

人自身は、波頭に臨んで彼岸の天堂を翹望して、早く其處に赴きたいと思つて居るやうな場合にあっては、即ち吾人の死を厭ふの念慮も亦恕す可きである。

O Joy! one step ashore, and that shore heaven!

To clasp a Hand outstretched, and that Hand His

Who waits my coming, all earth's fetters riven,

To share the glory of His saints in bliss!

To pass, by one short breath, from storm and stress,

To breathe new air in one unbroken calm!

To sleep, and wake in undreamt blessedness,

With conqueror's crown, white robe, and victor's palm!

十七 墓 邊

愛するものゝ死ぬる時に其の蒼ざめた顔の見納めをして泣いて居る時ほど人生に悲惨な瞬間は無い。然るに神は吾人に此の涙を與ふことを吝み給ふことが無い。蓋し涙は是れ自然の慰藉であつて、而かも亦天に入るの準備である。即ち泣けば心が慰むと共に人柄が神聖になるものである。故に『神聖なるかな悲しみの涙、エスすら泣き給ひしぞかし』とある。

ペタニーの姉妹が、悲惨の涙にかきくれて居たあはれな話を讀んでも、死の神は思ひも寄らぬ家庭を見舞ふものだと驚かれる。實に當時この姉妹の家庭などは、基督の久しく往來して居たまひし家庭であつて、且つ此の家の三人のものは皆基督の最も親しき知己であつたから、此の家庭をいまはしき死より遠ざげんことは、是等の基督の知己は申すに及ばず、基督御自身の喜び

であつたのであらうに、意外なる哉不幸中の不幸は俄然この家庭を襲ひ、姉妹は愛する兄弟の死體に抱きついて悲嘆の涙にくれて居たのである。さても基督は之を御覽じて彼等を咎め給うたか、と言ふに左様ではなかつた。基督も貰ひ泣きに泣いて聖涙を落し給うたのであつた。以上の話のうちで、最も吾人の感動するのは、『エスの泣きし』一事である。彼等姉妹もエスの泣き給ふを見たのは蓋し此の時が初めてであつたらう。少くとも基督が彼等と共に泣き、而かも同じことで泣き給うたのはこれが初めてであつた。而して此の悲嘆の瞬間にあつては、基督は常にも増して彼等と一つ心の人であつたのである。

此の基督の涙は非常に人間的のものであつた。彼は死者ラザルスは此の姉妹から永久に取り去られたものではない事を知つて居られた。其れでも彼は泣き給うた。彼は今數分の後にはラザルスを蘇生させて、悲しめる者其の心に一大歡喜を與へる事となるべきことを知つて居られた。其れでも彼は泣き給うた。彼は今にも此の家族のものが心の重みを取り去られて、讚美を歌ふやうに成る可きことを知つて居られた。其れでも彼は泣き給うた。即ち此の時の基督の涙は、非常に人間的で、非常に同情的で、且つ非常に慰藉に充ちたものであつた。然り而して約翰の福音書——即ち他の福音書よりも、一層エスの眞正の神格を吾人に證明した書物であるのに——にして、斯くの如く最も明白にエスの人たる性を十分言ひ表はして居るといふことは、如何にも面白い事實である。是れ則ち死者を蘇生さすほどの神性を有つたエスは、死なれて泣いて居る者どもと一緒に泣き給ふほど、人間らしい性質を備へて居給ふことの證據である。換言すれば、エスは喪者の涙を乾かす力あるほどに神的であつて、同時に自らも泣き給ふほどに人間的であつたわけである。

ある。

何人も葬式の行列が町を通って行くのを見たり、大勢の家族が喪服を着けて通るのを見たりすると、死神の毒手をしみる、恐ろしいものと思ふやうに成る。況して死神が吾人自身の家庭に臨み來り、又は吾人の親しきものに臨み來ることがあれば、之を恐るゝの情も一層烈しきわけである。今主エスも丁度此のやうな場合に立ち至つたものであつた。主は『何事につけても同胞兄弟と同様の身に造られ給ひし』御方であつたから、此のベタニーの家庭で始めて死神の恐ろしさを見られては、身にしみぐと感せられたものである。然らば何故に彼は泣き給うたのであるか。是れ彼が人の悲哀の時には何が必要なるかを知つて居給うたからではあるまいか。悲哀の時は、人は何よりも同情同感といふことを要求する。固より基督は是等の悲嘆にくれた人々に對して與ふべき大恩恵を有つては居られたのであるが、それは後まはしにして、先づ此の同情を彼等に示し給うたのである。此の同情の爲めに基督が如何ば

かりか吾人に接近せられたやうに感せらるゝものである。殊に殯室や墓所に泣き悲しんで居る者どもに取つては、如何ばかり基督吾人に近しい感じが此の爲めに起るか分らぬ。斯かる感じが吾人々類に起る時こそ、基督のやさしき愛の心よりの同情を吾人に示し給ふ好時節である。吾人は何か非常な悲哀が起らなければ、基督のやさしき慰安の御聲も耳には入らぬものである。丁度母親が小兒の達者な時は、家の内を走りまはつたり、外に遊びに出たり、好きなやうにさせて殆んど頓着もせないやうであるのが、一旦負傷をしたり、病氣になつたりすると、走つて行つて抱き上げ、胸に押しあてゝ、やさしい言葉をかけたりなどするやうなものである。さればイザヤの書にも『母のその子を慰むる如く、吾もなんぢらを慰めん』とある。而かも此の言葉は神の御口づからの御言葉である。

然し慰安だけが吾人の求むるものではない。若し吾人の愛する者の墓が、

吾人の心靈の本當の幸を與ふる場所であつたなら、慰安などはどうでもよい。墓場に居ると多くの嚴肅な思想が心中に動き、多くの眞面目な自問自答や深い反省が起つて來るものである。墓邊に行くと、死んだ人の一生を繰り返して思ひ出し、其の一生の中の様々な出來事も、今まで忘れかけて居たのが、懐ひ出され、且つ其の人と關係した吾人自身の過去生活も亦胸中に復習が出來ること疑ひないものである。斯かる追想の起つた時、往時不人情をしたことを思ひ出したり、愛に富みし其の人に、幾日も心配をかけるやうな毒舌を吐いた事を思ひ出したり、又残念にも其の人の死期を早めるやうな利己的な行や罪あることを爲したることを思ひ出し、斯かることが無かつたら、其の死を悲しむことも、斯く切なくは無からうにと思ひ、今となつては取りかへしがつかぬと後悔するやうな、——以上のやうな事のない人は、誠に仕合せである。

別に左様な事が無くつても、又追想は愉快なだけで少しもつらい事が無いやうな場合であつても、矢張り墓前に詣づるのは、人に嚴肅の感を起さしめるものである。人をして永久の實在に近づかしむるは、墓前の遐想に如くものは無い。固より其の印象はいつまでも消えないわけには行かぬ、また實際消え勝ちである。そして死者の顔を見て起つた言ふに言はれぬ有りがたい聖化された感情も、決して永久に續くものでは無い。また實際直ぐ無くなるものである。然し、人の心が枯木寒灰の如くでない限りは、斯くの如き時に聖きことを思ひ、極樂を思つて憧憬の深きを覺えざるものはなからう。また神とても辛い悲しみを下し給ふは、常に吾人の眼を天上に向はしめやうといふ御心からばかりでなく、之を吾人の心内に向はしめ、吾人をして死の如何なる意味あるものなるかを反省せしめんとの御心より出でたことであつて、即ち死は是れ永遠の生か、將た單に永久の死滅か、是れ思慕する故園よりの招き

なるか、將た單に愛と平和の家庭よりの永久の放逐なるか、といふ問題を、此の死の悲哀によりて吾人に反省せしめんとするのが神の御心なのである。

死者を葬らばなければならぬのは、如何にもつらい事である。長の間活潑な美しい靈を宿して居た肉體が、今や二た目と見られぬ様に變り果てたるを見ては、何と言ふやうも無き悲しさである。アブラハムならずとも其の腐爛せる様を見ては『吾に墓を與へ給へ、此の死者を目に見えぬやうに葬るべければ』と言ひたくなる。然し死者が今現に眠つて居る墓場は、是れ神聖な場所である。これに詣づることはいと聖き事である。墓場は悲しい所だなど言ふ人は言ふがよし、愛する者の眠れる場所を見るのは、悲しいながらも慰めがあるではないか。水夫が水葬せられると、其の母親は、一層のこと村の御寺であつたら、葬るにしても何のくらの慰安があるかも知れぬものを、さうなれば香花を手向けつゝ、程遠からぬ所に子供の居ることを空想し、慰

まうものをと感ずるものである。是れ人情さもあるべき事であつて、これあるが爲めに、吾人は神の恩愛を思ひあたる事もあるものである。

然し墓場に詣づる人があつても無くつても、其れはどうでもよい、兎も角も死別といふことは常に嚴肅な事柄である。若し甲が、乙の信仰を有して居ることを確信して居たらば、甲に取つて何れほどか別れが辛くなる事であらうに。即ち甲乙互に斯く別るゝは暫しの間で、復た相合ふことは永久であるとして居たらば、互の別れも世間に見受くるものゝ様な悲しさが無いであらうに。死者の後を弔らふ人々も、死者は唯『基督と共に在らんが爲め』に別れたものに過ぎないと確信して居れば、如何ばかり涙のうちにも慰めがあるであらうに。そして此の愉快なる確信あるときは、友が『世の人を愛して身を彼等の犠牲とし給うた神の獨り子を信仰して生活しつゝ』あつたと云ふ證據を見せて死んで行つたのを見て、大に慰安を感ずることであらう。

吾人は往々吾人の悲しみのことを多くの吾人の祈禱に對する神の御答へであると言ふことがある。即ち心情の清淨になり、生活の神聖にならんこと、又現世より完全に心靈が絶縁せんこと、而して信心が深くならんことの祈りに神が應じ給うたが爲めに、吾人の死の悲しみは有るものだと言ふことがある。然し吾人の愛するもの、死して天堂に往つた時、これは吾が祈禱よりも偉大なる基督の祈禱に對する神の御應であると考えざる事は無いやうである。抑も何が故に吾が愛するものは吾が側より取り去らるゝのであるか、一時でも長く引き留めることが出来るならば留めても見たい、と思ふ愛の絆を引きちぎつて、彼が取り去らるゝは何の故であるか。是れ豈吾人が「父なる神よ、爾の吾等に與へ給ひし此の愛する者をして、猶ほ吾が在るところに在らしめよ」と祈つて居る間に、一方では基督が「父よ、爾の吾に賜ひし者の吾が居る所に吾と偕に在らんことを願ふ」と祈つて居給ふからでは無からうか。

そして基督の祈禱の方が吾人の祈禱に勝つた爲めでは無からうか。尤も基督のが吾人のに勝つのも道理至極である。何となれば吾人の祈りは愚であるのに、彼のは賢く、又彼のは吾人の祈りよりも深い愛情から出た祈だからである。それでも猶ほ基督の祈に應へ給ふ神に對し不平を言ふことがあるか。有るわけはない。

Our eyes behold Thee not,

Yet hast Thou not forgot

Those who have placed their hope, their trust, in Thee;

Before Thy Father's face

Thou hast prepared a place,

That where Thou art there they may also be.

Sarah E. Miles.

十八 失意者の悲み

愛する者が極樂往生をしたといふわけでもなく、唯空々に此の世を去ッて了ったのでは、後に遺るものも一層氣の毒である、況んや其の死者にして、若し生前放埒な生活をして居た人であつたら、死なれたもの其の悲しみも亦格別である。悲哀のうちでも此の如き悲哀は明るみの無い悲哀である。従つて、やさしい同情のある手を以て斯かる人を撫でさすつてやる必要がある。然るに斯様な時には、彼等は基督を知らざる靈魂の成り行きにつき新約聖書の教へて居る厳格な教義を皆棄て、顧みもしたくないと云ふ氣になり、自ら欺きて、何も實際そんな意味で書いてあるのではあるまい。杯と、強いて安心しやうとする傾きがある。

罪の悔改めをせなかつたものが悲しむ可き目に遇ふことにつきては、古來

愛の權化たりし基督よりも明白に陳べた人はない。基督の救世愛人の全天職が人類を左様の運命に遇はせないやうにする事に在つた事は明白である。而して吾人は喪中に在る人々を慰むるに當りても、其の慰めたさの一念から、是等の基督の御言葉の峻嚴冒す可からざることを否定したり、又は何も其れほど恐る可きでもあるまい。杯と言つたりする事は、先づ誰しも憚る所であるが、喪中の人は往々之をやるのである。彼等は自ら慰まんと欲して、斯んな事を言ふ、曰く、「死んだ彼は實際に基督を信じて居た形跡が見えず、其の心や生活が生れ更つたやうな事も無かつたし、永劫の生活を始むる準備もなく、神に對する愛及び神意に對する柔順などが彼に有つたとも見えなかつたのに、彼はあれほど人を引きつける力と、あれだけの親切と寛懷と、正直と、没我とがあつた。斯かる人間が極樂に入れられぬやうな事は眞逆あるまい。」又曰く「神はそれ程まで自らの造られしものを苦しめ給ふやうな無情な御方

ではない。神の恐ろしい事を言ッて居なさるのは、唯威しであッて、其れ程實際ひどいものではない。曰く「既に現世の大苦患だけでも罰として十分であり、償ひとしても十分である」。曰く「死後の試煉といふことも別にあらう」。曰く「基督の所謂火とは、唯純化聖化の火のことであッて、現世に行はれなかつた事を、あの世で行ひ、以て靈魂をして終に永遠の福祉を受くるに足るものたらしめるものに過ぎないであらう」と。兎に角、斯ういふ理論とか想像とか希望とかいふものは、悲しみに裂かれし心を有てる人々が、誰も頼りにして慰安の基とする所のものである。而して若し出来ることなら、吾人にしろ誰にしろ、喜んで之に雷同することであらう。處が之を承認する人のないのは、即ちこれが信用の出来ぬ故である。第一、人の良心がこれでは満足せぬ、そのみならず、此の事についての唯一の教權となッて居る聖書が之に反對する。聖書には種々のことが書いてあッて、生れた時のことも死

んだ時のことも其の中には見えるが、其等の教義の中で終極といふことは、特に重きを置いて論じてある。悔改めのこと、救済のことは、皆此の現世限りで行はるゝ事であッて、死後には無いものである。死んでからの事は死ぬ前にした事で定まるものである。何人も斯んなことを悲しめる人の心に思はせたくはないのが人情である。然し、眞逆それほどの事はあるまいと、よい加減な事を言ふのは憚り多きことである。否定しやうにも否定が出来ぬほど明白に聖書に書いてあるから仕方が無い。同胞兄弟は慰めてやりたいが、神に對し半信半疑の態度を取るのには相濟まぬ仕儀である。

それでは外に何とも致方は無いであらうか、といふに、爰に唯一つある。即ち創世記に「天下を鞠くものは公義を行ふ可きにあらずや」とある大御言葉を楯に取るより外には仕方が無い。——且つ此の神の御言葉に頼ることとは、信仰心から言ッても満足な次第である。抑も、神は愛なると共に、亦絶對的

に義を重んずる御方である。従つて神の爲し給ふことが如何に苛酷なやうであつても、一として不正に人間を苦しめるやうな點が其の中に有るやうな事は、神自らゆるし給はざる所である。判官としての神によりて、人々一々の事情は逐一審理せられ斟酌せらるゝものである。即ち罪一等を減す可きの見込あらば、神は好意を以て之を参考に供し給ふものである。悪い嫉や、悪い境遇の力あること、遺傳せる犯罪癖の優勢なこと、誘惑の抜け目なく立ちまはること、及び心情を虜とせる罪に對して心情の抵抗力の微弱なること、——すべて是等のものは過不及なく斟酌せられるものである。息を引き取る間に本當に悔改をしたと云ふ徴候が少しでも有れば、否、神の目にのみ見ゆるやうな、微かなる徴候があれば、神は之に對し非常な斟酌を爲し給うて『真理實相に合へる』宣告を爲し給ふものである。而して其の宣告の絶對的に義しく、且つ見え透くやうに公明であること、言つたら非常なもので、萬人の

良心は之を聞いて不満足を感じるやうな事は如何しても出来ない程である。故に萬人の心情は此の御審判に對して丁度黙示録にあるやうな態度を取るのである。黙示録に曰く、『許多の人の呼ぶが如き大なる聲の天に在るを聞けり。曰く、ハレルヤ、救と榮と權力は我儕の神の有ち給ふ所なり、其の審判は直く且つ義なり』と。

利未記に驚く可き記事が載つて居る。これで見ると、非常な悲しみも信心あるものは喜んで耐へる事が出来るものらしい。アロンの子等なるナダブとアビウとが、神に對し罪を犯し、狂態を演じて神の前に異火をさづけられた所が『火エホバより出でて彼等を熾はらばせり、即ち彼等はエホバの前に死うせぬ』とある。斯く罪を犯して直ぐ其の場で殺されると云ふやうな即座の御審判が我が子等に下つたのを見て、アロンは如何に感じたであらう。彼も流石に神に反抗の氣を起した。然し其れも一時であつて、モーゼが神の御審判

は正しいといふことを教へ、神の御審判の目的は、即ち他人が同じやうに罪を犯すことの無いやうにといふにある事を教へ、神の名は頌む可きであると教へた時、アロンは『默然たりき』とある。斯く神の義に承服するの態度こそアロンの如く死者を弔ふ人々の探る可き相當の態度である。想ふに斯かる不運の結果が、アロンの場合に於けるが如く、却つて生き残つた者どもをして神を讚美するに至らしめる様な事は昔も今も變りは無いであらう。若し斯かる突然の死を見て、死者以外のものが今までよりも自らの罪を深く感じ、心中に神の命に従つて生活したいと云ふ新しい願を生ずることが有るなら、又若し此の爲めに彼等が基督に本當に信頼し奉る必要を切實に感ずるならば、而して又若し此の爲めにアロンと同じく、神を離れるやうな事が無くば、上述の如き恐る可き死も却つて神の榮光をあらはす所以であつて、自己の救済と神の名譽とを重んずる全ての人々は、神が何を爲されても、其の爲さ

れ方を見て、少しでも怨むやうな事はあるまい。
然し『嗚呼主よ、主の御審判の正しことは善く知れり』と言つて、仰いで神をのみ見奉り、神の聖なる義に承服して、其の義のうちに安心を求めんことは、非常な慰安になるものである。さればダビデが『われは黙して口をひらかず、此はなんぢの成し給ふものなればなり』と言つたのも、其の子アブサロムが非業の死を遂げしことを思ひ出でたる時であつた。斯かる言葉を吐くのは容易なことではない。之を言ふには餘程の信仰が無くてはならぬ。而かも亦強き信仰あるものは、斯く言はざらんとするも得ざる次第である。
悲哀に沈める人よ、唯々神に近よれ、そして現在の死の悲しみは、少くとも自己が神に近より得ん爲めに與へられしものであると觀せよ。神は何故に此の悲しみを與へることを義しと爲し給ひしか。其れは最後に説明して下さること請合であるから、其の説明のことは神に御一任申し、吾人は唯服従さ

へすれば可いのである。神と同じ目で萬事を観するやうになれば、神の爲し給ふことには何でもアーメンと言ふやうになる。さうなれば自ら天國の世嗣となつた喜びを一層認め得て慰安を感じるに至るであらう。若し眞に天國の世嗣であつて『わが家かく神ととも在るにあらすや。神よろづ備はりて鞏固なる永久の契約を我になしたまへり。吾が救と喜を皆いかで生せしめ給はざらんや』と言ひ得るやうになれば、其の慰安は必ず多少ある事であらう。『陰雲と闇黒と神を取り巻けり。されど義と正とは其の玉座の基をなせり』とある。神にのみ唯近づけよ、さらば悲しみの波濤は、此の烏き玉座の下にて静かに碎けて、斯くて『大安靜』が生ずるであらう。

O anguished heart, nigh breaking for the dead
Who died and made no sign,

Leave them with God: perhaps, ere life had fled,

They saw, at last, the Saviour Christ who bled,

Found their atonement in the Blood He shed,

And Trusted Love Divine.

十九 雲の奥

前章のやうな陰氣なところを頭の中から取り去つて『主を信じて』死んだ人々が、完全にして確かなる喜びを天國に得て居るところを想像すると、愉快を覺えざるを得ない。尤も此の天國の喜びのことに就いて聖書に書いてあることは案外少ない。天國については基督御自身も餘り弟子達に御話しがなかつた。『此の王其の宮殿内の榮光になれ給ふ餘り、常に之を口にすることを忘れ給ひしなり』と大僧正フェチロンは言つて居る。然し基督の言明し給ひしことは、絶對的の保證を以て言ひ給ひしものである。蓋し天國は即ち基督の御家であつて、既に之を熟知し給ふ故である。然し確實は左ほど確實でも、何故其の言ひ方の分量が少ないかには吾人も案外の感がある。基督の御口づからの言葉は形式こそ種々に成つて居るが、畢竟一つの思想を反覆し給うた

ものに過ぎないのである。即ち天國の喜びとは神と共にあるの喜びであるといふ思想一點張りであつて、其れを『樂園にて余と共に』とか『余と共に余の在る所に』とか、『われなんぢらを吾が在る所に請せし』とか、——そのやうな種々の形式で言ひ表はし給うたに過ぎないのである。然し又考へ直して見ると、基督を愛し奉る者ならば、これでも満足が行くのである。

これには自餘一切のものが含まれて居る。九重の雲の彼方は、深く霞に閉ぢられてあるに、此の一道の光明があるばかりで、吾人は彼方の奥を心眼に髣髴せしむることが出来る次第である。故に信心あるものは曰ふ『吾復た何をか要せん、管に基督と喜びを共にするのみならず、基督の御前に在りて之を共にし、我が救世主と、いと親しく、いと睦まじく交はり、一切の疑ひは永久に去り、神と吾とを引き離す全ての罪は消え失せて、神と吾との心と心は脈搏を共にすと云ふ。——これぞ吾が求むる極樂なる、我が願復た他にあ

る無し』と。斯くの如きは贖罪を受けたる靈魂が、土塊より成れる肉體を離れて直ちにいらんとする所の極樂界の有様である。即ち靈魂は『肉體を離る』や否や『主と共に』在るわけである。斯く一方より一方へ靈魂が飛び移るのは即刻的であつて、而かも意識的である。信者の死する時には、其の死と甦生との間に無意識の情態を経過するものであると想像して居る人や、又實際さう言つて居る人も少くないが、其んな無意識の間隙などは有るものでない。パウロは『眠れるもの』といふ言葉で之を言ひ表はして居るが、眠れるものは肉體のみである、心靈には左様の事は無い。現世にあつても、肉體は眠つて居て心靈が覺めて居ることは、夢なるものによりて證明が出来る。但夢の世界と現在の環象とは別々の世界であることは固よりである。死者の狀態を『眠れる』といふ言葉で言ひ表はすのは、是れ唯形容に過ぎない。其の意即ち平和と休安との謂ひであつて、無意識でふ意義は含まれて居ない。若

し夫れ、靈魂は基督が其の王國の至るを待ち給ふ間、復活の潜勢力を備へながら、寂滅の境涯を送つて居るなどといふ思想に至つては、是れ唯り聖書にかなはざるのみならず、第一考へても見ることも出来ない考である。苟くも「基督と共にあるの境涯であるからには、それを如何なる意味で解釋するにせよ、兎に角に意識的に基督と共にあることの義でなくてはならぬし。又基督との交りとは如何なるものであるか、を知り且つ感じて居る境涯でなくてはならぬ等である。

パトモスにて約翰の聞きたる天よりの聲は「主に在りて死ぬる死人は福なり。靈も亦いふ、然り彼等は其の勞苦を止めて息まん、其の功これに隨はんと」斯く言つたと書いてある。是れに依るときは、死者の福祉と休安とは無意識的であるといふ説は間違つて居る。且つ下界に見ることを得なかつた死者一生の事業の結果を他界の後に一見して喜ぶといふ基督教の思想に照らす

も、死者の無意識説は矛盾である。此の天よりの聲といふは、即ち例の感謝のことであつて、言は簡單なれども、救はれし基督信者が不可見の生命を有すとの教を以て、よく新約聖書を補ふに足るの一語と言つて差支はない。基督信徒は意識的に「福祉」を受け、且つ永久に福祉を受くるものであつて、其の福祉は基督其の人の福祉と同じである。基督の功これに従はんとある如く、彼等も勞を止めて其の功これに従ふの境涯に在るものである。彼等の仕事は、一つも前につかへて居らぬ。丁度基督の事業が既に畢つて居ると同じである。又彼等は基督と同じく、將來今よりも大なる福祉を得んことを待つて居る。基督が全世界の王としての榮光を以てあらはれん日を待ち給ふが如く、彼等は靈が再び肉體と結びつく日の至らんことを待ち居るものである。其の日至らば、彼等の肉體も天上の基督の御體の如くに榮光を放ち、一大能力を有して、前世の腐れ易い肉體では出来なかつたやうな高尚な仕事も務まるや